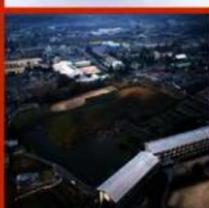




物部氏の古墳

柚之内古墳群

SOMANOUCHI Tumulus Group : Mononobe Clan's Tombs



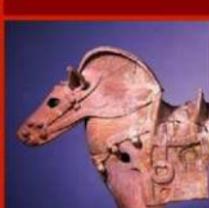
2021

編集

天理大学附属天理参考館
天理市教育委員会

発行

天理市教育委員会



物部氏の古墳

柚之内古墳群

SOMANOUCHI Tumulus Group・Morinobe clan's Tombs

2021

編集

天理大学附属天理参考館
天理市教育委員会

発行

天理市教育委員会



【例 言】

1. 本書は天理大学附属天理参考館・天理市教育委員会が共催する企画展「物部氏の古墳 杣之内古墳群」にあわせて作成した杣之内古墳群の解説書である。
2. 本書は天理大学附属天理参考館・天理市教育委員会が共同で執筆・編集し、天理市教育委員会が発行した。執筆の分担は下記のとおりである。

石田大輔 (天理市教育委員会文化財課) 1～9、17～32、58～59
 日野 宏 (天理大学附属天理参考館) 16、33～39、41～42、55～57
 藤原郁代 (天理大学附属天理参考館) 10～15、40、43～54

3. 本書作成にあたり下記機関・個人の協力を蒙った。

天理高等学校
 天理大学文学部考古学・民俗学研究室
 天理大学歴史研究会
 奈良教育大学金原研究室
 奈良県立橿原考古学研究所
 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
 埋蔵文化財天理教調査団
 青柳泰介 池田保信 石黒勝己 小田木治太郎
 金原正明 桑原久男 西藤清秀 杉山拓己 平井洸史
 山内紀嗣

4. 本書に掲載した古墳の多くは私有地等にあり、立ち入りには許可が必要となる場合がある。

■第 87 回企画展「物部氏の古墳 杣之内古墳群」

- 会期 令和 3 (2021) 年 7 月 14 日 (水)～9 月 6 日 (月)
- 会場 天理大学附属天理参考館 3 階企画展示室
- 主催 天理大学附属天理参考館・天理市教育委員会
- 後援 奈良県・天理市・天理市観光協会
歴史街道推進協議会
- 協力 埋蔵文化財天理教調査団
天理大学文学部歴史文化学科
天理大学歴史研究会
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
奈良教育大学金原研究室

【表紙写真】

- 1 東乗鞍古墳 横穴式石室 撮影：天理市教育委員会
- 2 空から見た小墓古墳 撮影：天理市教育委員会
- 3 峯塚古墳 墓石 所蔵：天理大学文学部考古学・民俗学研究室
- 4 小墓古墳 笠形木製品 所蔵：天理市教育委員会
- 5 峯塚古墳 横穴式石室 撮影：天理市教育委員会
- 6 杣之内火葬墓 海獣葡萄鏡 所蔵：埋蔵文化財天理教調査団
- 7 塚穴山古墳 家形石棺片 所蔵：天理大学附属天理参考館
- 8 小墓古墳人物埴輪 (番持人) 所蔵：天理市教育委員会
- 9 小墓古墳人物埴輪 (男性) 所蔵：天理市教育委員会
- 10 西乗鞍古墳 須恵器大甕 所蔵：天理市教育委員会
- 11 塚穴山古墳 横穴式石室 撮影：天理市教育委員会
- 12 空から見た西山古墳 撮影：天理市教育委員会
- 13 西山古墳外壇 朝顔形埴輪 所蔵：埋蔵文化財天理教調査団
- 14 杣之内古墳群南部 地形起伏図 作成：天理市教育委員会
- 15 空から見た杣之内古墳群南部 撮影：天理市教育委員会
- 16 ツルクビ第 1 号墳 馬形埴輪 所蔵：埋蔵文化財天理教調査団
- 17 ツルクビ古墳群 全景 提供：埋蔵文化財天理教調査団

【表紙写真の配置】

1	2	3	4
			5
6		8	9
7			13
10	11	12	
14			
15	16	17	

【写真】

- 西乗鞍古墳 地形陰影図 作成：天理市教育委員会
 西山古墳墳頂より奈良盆地を望む 撮影：天理市教育委員会

【裏表紙写真】

- 小墓古墳 円柱を伴う扇床式の家形埴輪 所蔵：天理市教育委員会

目 次

I 杣之内古墳群	1	III 杣之内古墳群の中小古墳	33
布留遺跡と周辺古墳群	2	赤坂古墳群	34
杣之内古墳群の移り変わり	6	ツルクビ古墳群	37
52B 地名としての「杣之内」	8	52B 実在しなかった「鐘子山古墳」	39
		笠神山古墳	40
II 杣之内古墳群の首長墳	9	須川第1～3号墳	41
西山古墳	10	ウテビ山第1～3号墳	43
小半坊塚古墳	15	天理参考館所蔵の杣之内出土品	44
東天井山古墳・西天井山古墳	16	52B 保昌塚古墳	44
西乗鞍古墳	17		
52B 西乗鞍古墳の埋葬施設探査	22	IV 杣之内古墳群の終焉	45
52B 石碑「大元帥陛下駐蹕之處」	22	塚穴山古墳	46
小墓古墳	23	峯塚古墳	52
52B 焼戸山古墳	28	52B 墓ノ前の古墳	54
東乗鞍古墳	29	杣之内火葬墓	55
52B 杣之内石塚古墳	32		
		参考文献・出典	58

001 北東から見た西山古墳

杣之内古墳群で最大規模を誇る西山古墳。
日本最大の前方後方墳としても著名。



1 杣之内古墳群

奈良県天理市の中心市街地の地下に眠る布留遺跡は、古墳時代には儀礼・政治・生産といった様々な機能を兼ねそなえる奈良盆地内有数の集落であった。この布留遺跡に拠点を置いた可能性が高いと考えられているのが、古代史上の有力氏族「物部氏」である。

布留遺跡を取り巻く東西2km、南北3kmほどの空間には、杣之内古墳群、石上・豊田古墳群、別所古墳群が広がっている。なかでも杣之内古墳群は、日本最大の前方後方墳である西山古墳、同時代の大王墳に次ぐ規模を誇る西乗鞍古墳、古墳時代終末期の円墳としては最大級の塚穴山古墳、多彩な内容を見せる群集墳の展開など、古墳群を築いた集団の強勢と重層性を如実に物語る存在である。

布留遺跡に拠点を置いた地域勢力の墓域と目される杣之内古墳群の盛衰をたどることによって、王権の中核で権勢を誇った「物部氏」の姿に迫りたい。

002 空から見た天理の中心市街地

昭和50(1975)年ごろ撮影の天理の中心市街地。
布留遺跡とそれを取り巻く古墳群の舞台である。



布留遺跡と周辺の古墳群

天理市の中心市街地は奈良盆地東縁の山裾、大和高原から盆地内に流下する布留川が形成した扇状地上に広がっている。この市街地の下には、東西2km、南北1.5kmにわたって広がる布留遺跡が存在する。

布留遺跡と石上神宮

布留遺跡は旧石器時代から現代に至るまで各時代の遺構・遺物が検出される大規模な複合遺跡だが、特に古墳時代中期～後期（5～6世紀）には、儀礼・政治・生産といった様々な機能を兼ねそなえた奈良盆地内有数の集落へと成長する。

この布留遺跡を見下ろす高台に、古代史上重要な石上神宮が位置する。この神社はもともとヤマト王権が奉斎し、王権の管理する宝物を神庫に納めていたと考えられているが、遅くとも6世紀代には有力氏族である「物部氏」が祭祀や神宝を掌管していたことが分かっている。

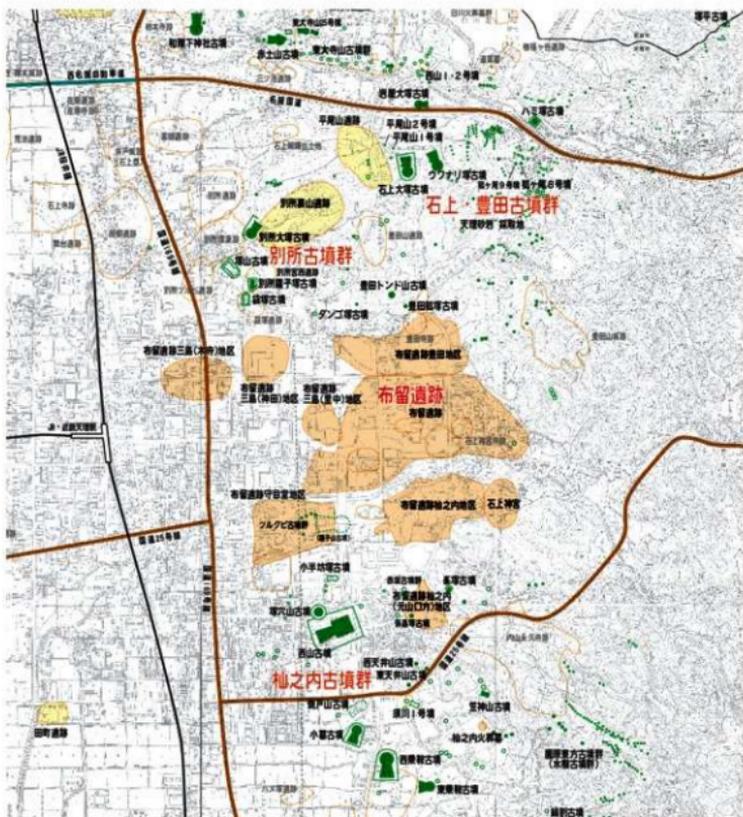
このように石上神宮と深い関わりを有する「物部氏」が拠点を置いた可能性が高いと考えられているのが、石上神宮の眼下に広がる布留遺跡である。

003 布留遺跡と袖之内古墳群の位置
大和川水系布留川の流域に位置する布留遺跡と袖之内古墳群。



004 布留遺跡周辺の地形

大和高原から流下する布留川が形成した扇状地上に布留遺跡が立地し、その奥縁に古墳群が取り巻いている。袖之内古墳群は布留遺跡の南側に



005 布留遺跡周辺の古墳群・遺跡

拠点化する布留遺跡

古墳時代前期前半までの布留遺跡は弥生時代以来の農耕集落的な景観を見せていたが、古墳時代前期後半には、のちの石上神宮の地で祭祀行為が始まった可能性があり、集落の様相が変容し始める。

続く古墳時代中期～後期になると、武器や玉、鍛冶の工房が出現し、ものづくりの拠点化が進む。ウマの飼養が始まるのもこの時期である。また、大規模な溝の掘削や整地行為、大型掘立柱建物の建設、特殊な円筒埴輪を樹立した祭場の出現など、儀礼・政治の舞台が整えられ、傑出した集落へと変貌する。

こうした布留遺跡の拠点化の過程は、歴史の表舞台に姿を見せ始めた「物部氏」の台頭と、まさに呼応する動きと言えるだろう。

布留遺跡を取り巻く古墳群

布留遺跡の周辺には、布留遺跡を拠点とした地域勢力との密接な関わりが想定される多数の古墳が分布する。南方の段丘上には仙之内古墳群が、北方の丘陵上には石上・豊田古墳群、丘陵南西裾には別所古墳群があり、布留遺跡を取り巻くこれらの古墳群は全体でも東西2km、南北3kmほどの空間に凝集している。確認された古墳の総数は300基を超える。

これらの古墳群は、布留遺跡を拠点とした地域勢力の墓域にほかならないと考えられている。この地域勢力を、古墳時代のどの時点から「物部氏」と呼ぶべきなのか。今も議論が分かれる命題ではあるが、いずれにせよ「物部氏」の実像に迫るためには、古墳群の内実を知ることから始めなければならない。



006 戦後間もないころの榑之内古墳群周辺
昭和21(1946)年に米軍が撮影した航空
写真。現代では消滅した古墳の姿も写る。



菅川

布留町

石止町

天理参事館

天理小学校

天理高等学校

天理大学

天理高校
グラウンド

天理図書館

藤塚古墳

御経野町

磯穴山古墳

菅島塚古墳

勾田町

西山古墳

林之内町

天理中学校

西天井山古墳 南天井山古墳

国道25号線

鏡戸山古墳

なら歴史芸術文化村
(整備中)

五神山古墳

滝池

林之内火葬場

小墓古墳

林之内浄水場

鏡屋競技場

西条新古墳

東条新古墳

夜都伎神社

0075年の林之内古墳群周辺
平成20と2008年撮影の航空写真。天理
大学周辺の土地利用が大きく変化。

志木町

1:10,000

そまのうち

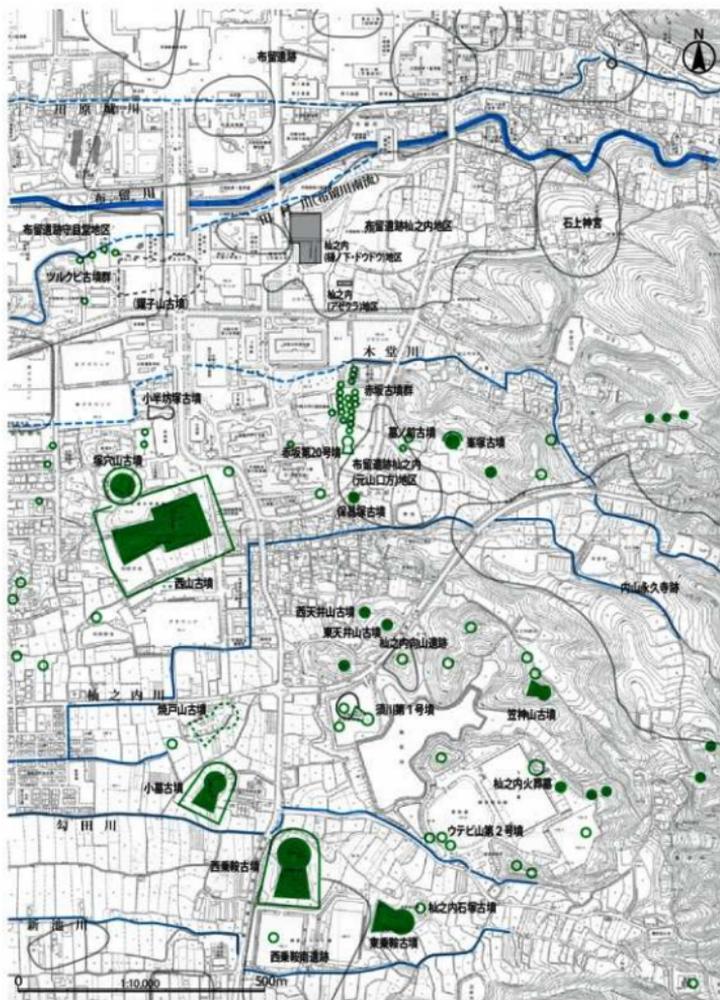
杣之内古墳群の移り変わり

杣之内古墳群の位置

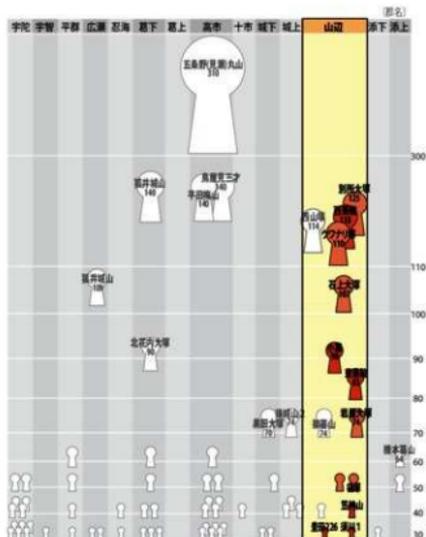
杣之内古墳群は布留川南側の低位段丘および中位段丘に分布する古墳群の総称で、おおむね現在の天理市杣之内町、勾田町、守目堂町、御経野町、乙木町の範囲に所在する。古墳の総数は約80基を数える。

杣之内古墳群の移り変わり

古墳時代前期中葉 小半坊塚古墳、西山古墳が相次いで築かれる。さらに中小規模の古墳が存在した可能性も指摘されているが、大型前方後円墳が累代的に築かれるという状況にはない。日本列島最大の前方後方墳である西山古墳は布留遺跡の至近距離にあり、布留遺跡の地域勢力を背景に築かれたものと考えられるが、大和古墳群の系譜を引く埴輪や、桜井茶臼山古墳



008 杣之内古墳群分布図

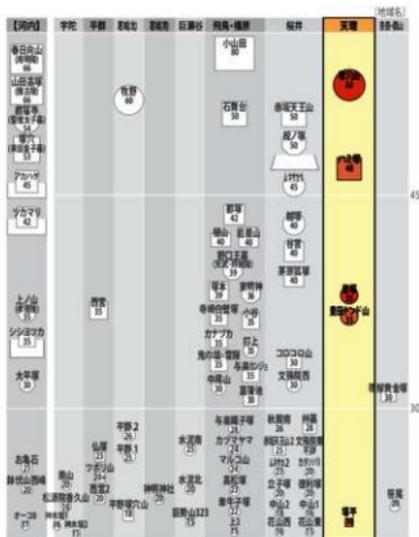


011 古墳時代中期末～後期 奈良盆地周辺の前方後円墳
布留遺跡周辺に大型前方後円墳が集中している。

径約63mに達し、当時としては最大級の円墳である。続く**峯塚古墳**は三段に築かれた径35mの墳丘を持ち、**斉明期前後の飛鳥地域で重用された凝灰質砂岩(天然砂岩)**を墳丘に敷き詰めている。特に**塚六山古墳**の存在は、布留遺跡の地域勢力が前方後円墳造営の停止後も他に卓越する強大な力を保持し、首長墳の造営を続けたことを物語る。

地域勢力の変貌と古墳群

布留遺跡を拠点とした地域勢力は、古墳時代前期には拠点的な集落を営みつつあったが、前期中葉にその集落近傍に**列島最大規模の前方後円墳**である**西山古墳**



012 古墳時代終末期 奈良盆地周辺の大型古墳
塚六山古墳は円墳としては最大規模を誇る。

を築造するうえで、あくまで初期ヤマト王権の強い関与のもとに実現した。だが、中期末になるとついに造墓活動の自律性を獲得し、後期には自らの領域内に広く墓域を拡張して累代的に首長墳を営むとともに、群集墳を含む重層的な墳墓階層を生じた。このような中期末以降の布留遺跡周辺の古墳群の質的転換は、ありふれた農耕集落から拠点集落へと成長した布留遺跡の変容と、まさに表裏一体の関係にあった。袖之内古墳群をはじめとする布留遺跡周辺の古墳群は、地域勢力が王権を担う有力氏族「**物部氏**」へと変貌を遂げていく姿をまざまざと見せつけている。

地名としての「袖之内」

袖之内古墳群の名称のもととなった「**袖之内**」は、**明治12(1879)年に山口村・木堂村・内山村が合併した際に生まれた地名**。山口の山と木堂の木で「袖」、内山の「内」を「之」でつないだ新地名である。

のちに全国規模で進められた「**明治の大合併**」でも、複数の村をまとめる際に新たな村名を決めるにあたり、こうした合成地名が多数出現することになる。

町村合併標準提示

第六条 合併ノ町村ニハ新ニ其名ヲ撰定スヘシ、旧各町村ノ名称ハ大字トシテ之ヲ存スルコトヲ得、尤大町村ニ小町村ヲ合併スルトキハ其大町村ノ名称ヲ以テ新町村ノ名称トナシ、或ハ互ニ優劣ナキ數小町村ヲ合併スルトキハ各町村ノ旧名称ヲ參互折衷スル等適宜斟酌シ勉メテ民情ニ背カサルコトヲ要ス、但町村ノ大小ニ拘ハラズ歴史上著名ノ名称ハ可成保存ノ注意ヲ為スヘシ

明治二十年六月十日内務省令第百五号

013 明治政府が示した町村合併の指針
各村の名称を折衷して新地名を作ること推奨している。

II 柚之内古墳群の首長墳

特定の地域勢力を代表する「首長」のために築かれた古墳を「首長墳」と呼んでいる。古墳群全体のなかで各時期ごとに最も傑出した規模・内容の古墳がその候補となる。歴代の首長墳の変遷をたどることは、首長が統率・支配した地域勢力の動向を探るうえで有力な手がかりとなる。

布留遺跡を拠点とした地域勢力の存在を背景に、柚之内古墳群では首長墳と目される大型の前方後円墳（前方後方墳）が複数築かれている。

初期のものとしては、柚之内古墳群北部に現れた古墳時代前期中葉の西山古墳が大王墳にも迫る巨大な規模の傑出した首長墳だが、その存在は孤立的にも見える。古墳時代前期中葉から中期にかけて、累代的に首長墳が築かれるという状況には未だ至っていない。

そうした様相が一変するのは古墳時代中期末の西乗鞍古墳からで、柚之内古墳群南部に全長 100 m 前後の前方後円墳が相次いで築造される状況は、歴代の首長墳が順に築かれていく様相を想起させる。こうした累代的な首長墳の造営は、やがてその舞台を布留遺跡北側に広がる石上・豊田古墳群や別所古墳群に移しながらも、古墳時代後期末の前方後円墳造営停止まで絶え間なく続けられていく。

014 空から見た柚之内古墳群南部

西乗鞍古墳・東乗鞍古墳を北から望む。後方には大和・柳本・纏向古墳群など奈良盆地東南部の古墳群。



にしやまこふん
西山古墳

東から奈良盆地に向かってのびる段丘の先端近くに築かれた大型の古墳である。明治時代以降、天皇陵クラスの巨大な古墳であることは認識されていたが、前方後円墳と考えられていた。大正時代末には国の史跡に指定されることになって測量がおこなわれ、全長約180mの前方後方墳であることが分かった。さらに、昭和44(1969)年により精度の高い測量がおこなわれた結果、3段築成の墳丘は最下段が前方後方形で上の2段は前方後円形という、特異な墳丘であることが明らかになった。

平成24(2012)年に袖之内古墳群研究会によって墳丘の3次元レーザースキャニング測量と、地中レーダ探査並びに電気比抵抗探査がおこなわれた。3次元レーザースキャニング測量の結果から、墳丘は全長185m、後部の高さ約15mで40m前後の濠がめぐっていたと考えられている。そして地中レーダ探査と電



015 史跡西山古墳の標柱
後部東側に立つ史跡の標柱。西山古墳の国史跡指定は古く、昭和2(1927)年のこと。

気比抵抗探査では、後部の中央、地表下約1mが天井となる、最大で4.5×12mの竪穴式石室とみられる反応があった。

墳丘は暖かい季節には草木が生い茂って危険であるが、冬には写真のように整備されて墳丘の形がよく分かり、上りやすく、墳頂からの眺めは抜群である。



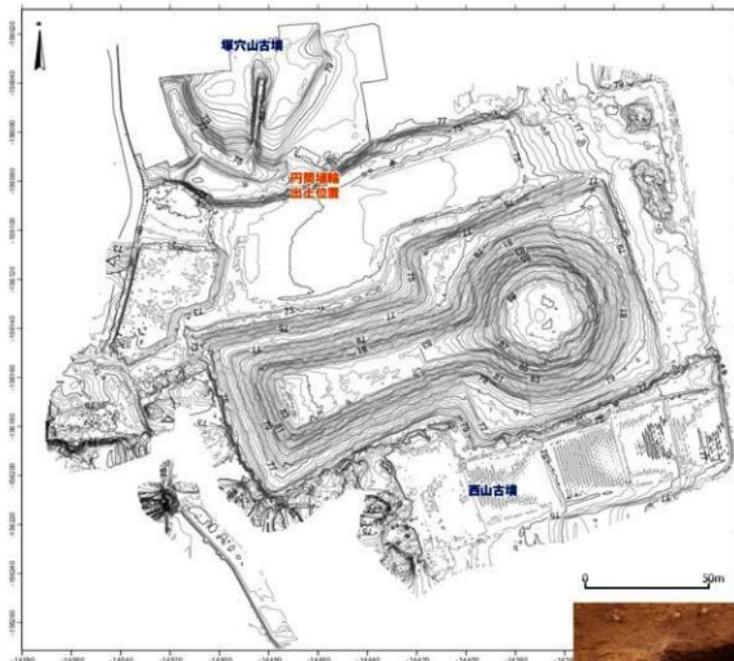
016 空から見た西山古墳・塚穴山古墳
昭和24(1949)年撮影。古墳時代前期の西山古墳が墳丘を
囲む多段の濠。後期の塚穴山古墳が隣りついていた。



017 西山古墳上段より後部を望む
後方古墳跡の立つ人が古墳跡のように見える。



018 西山古墳の前部より後部を望む
春先のころの西山古墳は草木が生い茂っておらず、
雄大な墳丘を一目で見渡すことができる。



019 西山古墳・塚穴山古墳 測量図

3次元レーザースキャニング測量で作成された測量図。西山古墳北側に古墳時代終末期の大型古墳、塚穴山古墳がある。

020 西山古墳外境で見つかった埴輪棺墓

塚穴山古墳外境は西山古墳外境に一部が重複していた。塚穴山古墳の発掘調査の際に、下層の西山古墳外境で埴輪棺墓を検出。もともと西山古墳に並べられていた埴輪を転用してつくられたものと考えられている。



021 市産神社の板石

幅3.65m、下が埋まった状態で高さ1.64m、直径約30cmの円孔が2個開いている。



022 天理図書館横の板石

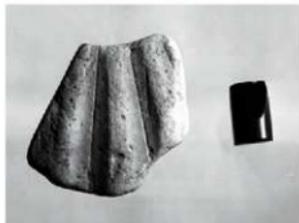
長さ2.75m、幅1.26～1.63m、厚さ約30cm。割れているが、丸みを帯びた縁が一部残っている。直径24cmの円孔がある。

奈良県旧山辺郡の文書である『名勝旧蹟古墳墓』(明治32年)は、郡内の主な古墳について図付きで説明している。そのなかで西山古墳が明治20(1888)年ごろに開墾された際に「管石金環勾玉土器古刀ノ類」が出土したと記す。また別に鏡、鐵形石製品、管玉、鐵剣、鐵刀が出土したという伝承もあり、鐵形石製品、車輪石、鐵剣の写真が残っている。車輪石は長さ4.2cm、鐵剣は17.7cmである。

昭和44(1969)年の測量の際に墳丘上で多数の埴輪片が採集されている。多くは円筒埴輪であるが、わずかに形象埴輪の小片が混じる。

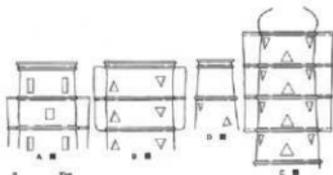
また前方部北側の外堤からは、棺に転用された円筒埴輪が出土している。西山古墳の墳丘で採集された円筒埴輪と似ていることから、もとは西山古墳に並んでいたとされる。

円筒埴輪は上の方が開くもの、径が変わらないもの、上がすぼまるものがあり、口縁の直径が約22cmから44cmと差がある。いずれも口縁とそのすぐ下の突帯の間隔が狭いことが特徴である。突帯は幅が約8cmで、罫にも突帯が付いている。透孔は三角形と方形がある。朝顔形埴輪は現高95cmあり、透孔は三角形である。突帯は5本あり、最上段の突帯より上が膨らんだような形である。最上段から最下段の間に幅11cmの罫が付いている。円筒埴輪と同様に、罫にも突帯が付く。これらの埴輪の特徴などから西山古墳の時期は古墳時代前期後半と考えられている。



023 西山古墳 石製品・鉄剣

昭和45(1970)年に撮影された車輪石・鐵形石製品・鉄剣の写真。



024 西山古墳外堤 埴輪模式図

天理市丹波水町の市座神社境内と天理図書館の東側に、円孔を穿った大きな板石がある。昭和のころにはそれぞれが近くの橋石に使われていたもので、そのため形が変わったり割れたりしているが、西山古墳の埋葬施設に用いられていたものかもしれないという考察がある。

025 西山古墳で採集された形象埴輪

昭和44(1969)年の測量の際に墳丘上で採集された形象埴輪。中央は草履形埴輪、左は家形埴輪か。





026 西山西墳外堤 朝顔形埴輪

7個体出土した埴輪のうち、現存する最大の個体。口縁部は失われており、肩部以下が残存している。壺にも突帯表現がある。



027 西山西墳外堤 円筒埴輪①

各段に三角形透孔をあける円筒埴輪。口縁と最上段の突帯が近接している。最上段の突帯から下二段にかけて鰭をつけている。



028 西山西墳外堤 円筒埴輪②

右上の個体と同タイプの円筒埴輪。写真には写っていないが、鰭がつけられていた痕跡が残っている。



029 西山西墳外堤 円筒埴輪③

各段に長方形透孔をあける円筒埴輪。上から2段目の突帯以下に鰭をつけている。



030 西山西墳外堤 円筒埴輪④

上方に向かってすぼまる形状の円筒埴輪。鰭を持たない。小半坊塚古墳出土円筒埴輪（写真031）に酷似。

こはんぼうづかこふん 小半坊塚古墳

西山古墳の約 140 m 北側にあった全長約 85 m の前方後円墳で、明治時代に勾玉・金環・管玉・鉄刀・土器などが出土したと伝えられている。昭和 18 (1943) 年に海軍の工事によって消滅した。近接して北側と南側にやや小型の古墳があったという記録があるが、いずれも今は姿を消している。

昭和 18 (1943) 年の工事の際に、墳丘の裾には直径約 45cm の円筒埴輪が、さらに後円部の一段高い位置にはやや細めの円筒埴輪が並んでいることが観察された。板状の石の破片が散乱していたので、埋葬施設は竪穴式石室だったと推定されている。

このとき採集された円筒埴輪が 1 点天理参考館に伝わっている。口縁から約 40cm が残っており、口縁とそのすぐ下の突帯の間隔が狭く、直径は口縁で 23cm、下が 25cm と、上の方が細い特徴のある埴輪である。大きさから考えて後円部に並んでいたものであろう。三角形の透孔が、向かい合う位置で直交して計 4 個残っている。この埴輪の特徴などから、古墳の時期は古墳時代前期後半と考えられる。



031 小半坊塚古墳 円筒埴輪
西山古墳外堤出土の円筒埴輪 (写真 030) によく似ている。

032 在りし日の小半坊塚古墳

昭和 10 (1935) 年に撮影された小半坊塚古墳の墳丘。



ひがしてんじょうやまこみん にしてんじょうやまこみん 東天井山古墳・西天井山古墳

古墳は天理市の東方の山塊より西にのびた丘陵が、さらに北西に分岐した尾根上に築かれている。西乗鞍古墳から北北東に500mの地点である。東天井山古墳はこの尾根の最も幅の広い所に占地している。西天井山古墳は、その西の先端部に位置する。北からの眺めは独立丘陵上に築かれた古墳の観を呈し、見かけの墳丘の規模は実際よりはるかに大きく見え、視覚的效果を上げている。

昭和52（1977）年の天理大学歴史研究会の墳丘実測によって、東天井山古墳は直径37m、高さ4.8m、西天井山古墳は直径28m、高さ4.3mの円墳であることが判明した。両方の古墳の墳頂中央部には大きな盗掘坑があるが、周辺には石材などが認められないこ

とから、埋葬施設は粘土槨か木棺であったと推測される。

東天井山古墳の墳丘斜面には河原石を利用した葺石が露出する部分为数か所で見られるほか、墳丘各所で埴輪片が採集されている。埴輪には円筒埴輪、朝顔形埴輪、蓋形埴輪、家形埴輪がある。円筒埴輪は直径が30cm前後のもので、透孔には円形のものど方形のものがある。西天井山古墳では葺石は確認されていないが、円筒埴輪、朝顔形埴輪、盾形埴輪が採集されている。円筒埴輪には黒斑を有するものがあり、直径が30cm以上の大型のものと、20cm前後の小型の2種類があり、透孔はすべて円形であった。

古墳の築造時期は円筒埴輪から東天井山古墳が古く、これらは古墳時代中期に相前後して築造された首長墳であったとみられる。



033 東天井山古墳 採集された埴輪
朝顔形埴輪（上段）、蓋形埴輪（下段左2点）、
家形埴輪（下段右端）。



034 西天井山古墳 採集された埴輪
円筒埴輪・朝顔形埴輪（上段、下段左3点）、
盾形埴輪（下段右端）。

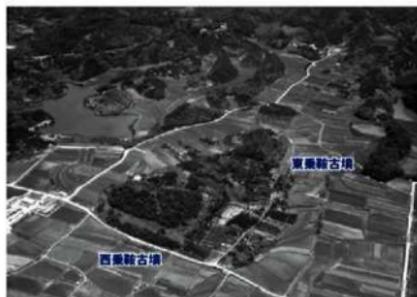


035 北から見た東天井山古墳・西天井山古墳
左が東天井山古墳、右が西天井山古墳。先に築かれた
東天井山古墳は西天井山古墳より規模が一回り大きい。

にしりのくらくらこみん 西乗鞍古墳

柚之内古墳群南部で最大の前方後円墳である。東方の東乗鞍古墳や西北方の小墓古墳とは近接した位置関係にある。墳丘は前方部を南に向ける前方後円墳で、全長約118m、後円部直径約66m、高さ約15.5mを測る。周囲より一段高い基壇状の平坦地の上に墳丘があり、この平坦地には周濠と外堤が埋没していることが発掘調査で明らかになった。さらに、この平坦地の南・東側にも古墳を周辺地形から切り離すように成形された大規模な掘割がめぐっている。

周濠及び外堤までを含めた全長は約165m、古墳南側の掘割をも含めた全長は約190mに達する。埋葬施設は知られていないが、これまでの埋葬施設探査により後円部に大型の横穴式石室が存在する可能性が高いものと想定されている。墳丘は航空レーザ測量により高精細の測量図が作成されている。



036 往年の西乗鞍古墳・東乗鞍古墳

昭和43(1968)年に撮影された航空写真。西乗鞍古墳・東乗鞍古墳周辺のかつての様子を今に伝える。

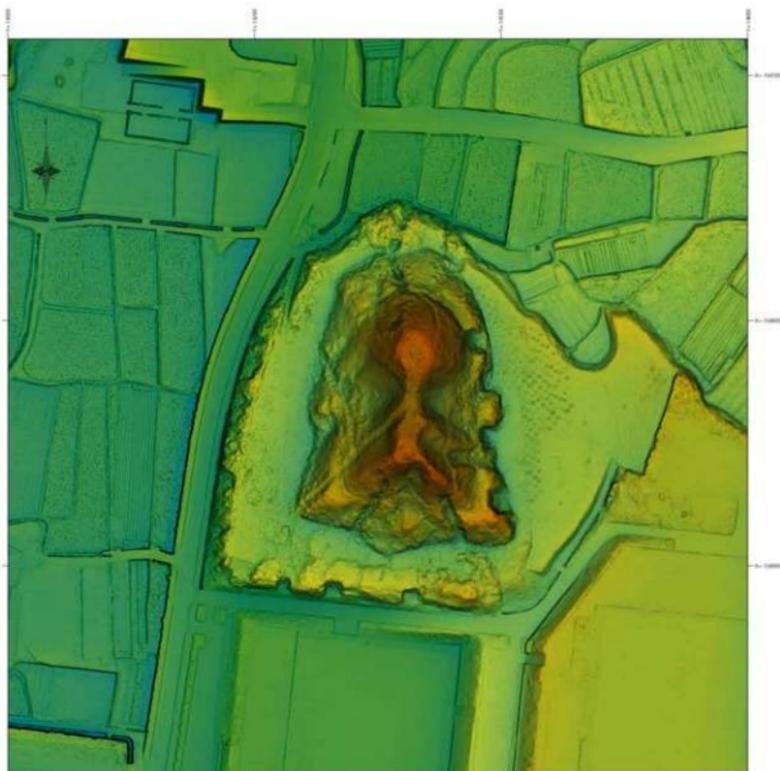
これまでの発掘調査により円筒埴輪、形象埴輪、須恵器、土師器等が出土している。円筒埴輪、須恵器からみて、築造時期は古墳時代中期末と考えられる。当該時期の首長墳としては大王墳に次ぐ規模を誇っている。



037 空から見た西乗鞍古墳・東乗鞍古墳

西乗鞍古墳の墳丘の周濠は桔田圃より一段高い位置にある。遺構の首長墳としても認められる。





040 西乗鞍古墳 地形起伏図

周田より一段高い台状の地形の上に前方後円形の墳丘が載っている様子が分かる。



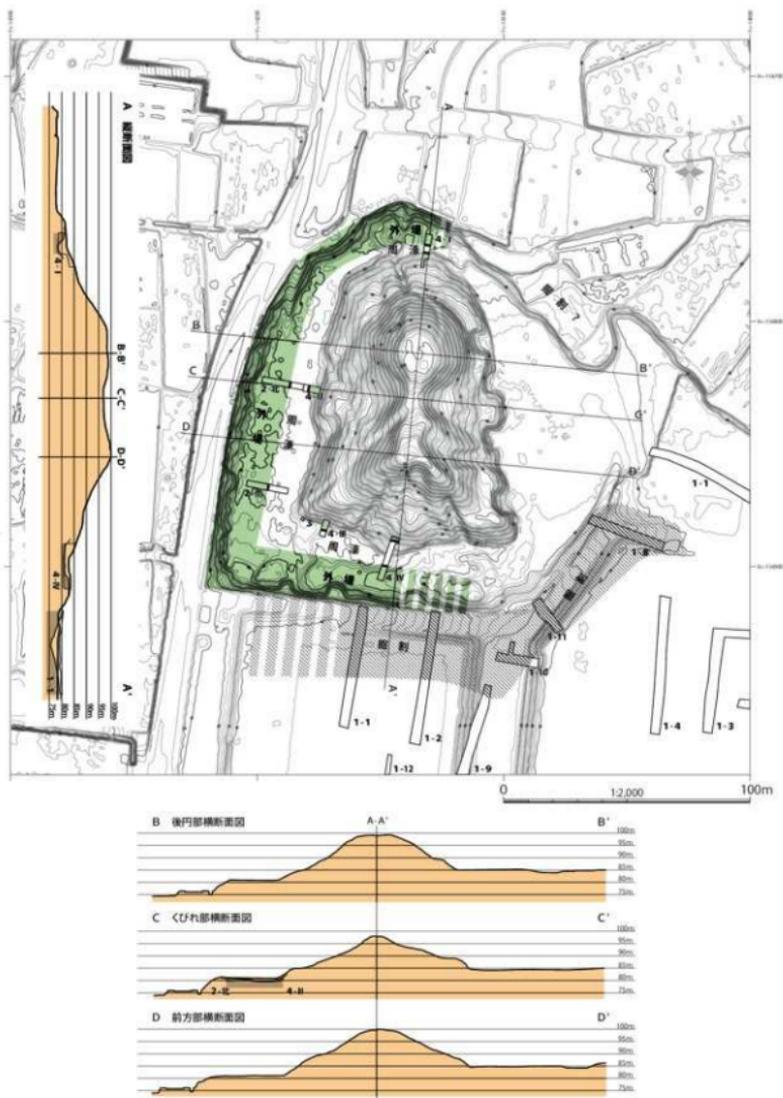
041 西乗鞍古墳 現存する外堤

墳丘南側に残る帯状の高まり。写真左に墳丘がある。周濠と外堤が埋没して形成された地形である。



042 西乗鞍古墳 外堤の発掘調査

古墳外側（写真奥）に向かって下降する旧表土の上に盛土して外堤がつくられている。写真手前の壁面には周濠を埋めた土層が観察できる。



043 西乗鞍古墳等高線図・断面図

航空レーザ測量により作成した等高線図。前方部前面の中央付近が外側に張り出しているのは、古墳築造後の地滑りによるもの。古墳東側では土取りによる墳丘の形状変化が著しい。墳丘は上下二段築成の可能性が高く、墳丘斜面には平坦面の名残を思わせる緩傾斜面が部分的に残る。古墳の周囲には周濠・外堤があり、かつては古

墳の四方を取り巻いていたらしいが、現在は埋没して一部を除いて広大な平坦地になっている。また、外堤のさらに外側にも、古墳を外周から切り離すために自然地形を整えたと思われる掘割が存在したことが確認されている。

築造後の地形変化が著しく、外堤外縁の随所に見られる方形の欠き取りは土取りによるものと思われる。



044 西乗鞍古墳 周濠底の転落石・埴輪出土状況
前方部西側の周濠底からは、墳丘から転落したと思われる石や埴輪片が出土した。



045 西乗鞍古墳 くびれ部付近から出土した蓋形埴輪
くびれ部付近からは形象埴輪の出土が目立ち、造り出しが存在した可能性も考えられる。



046 西乗鞍古墳 周濠から出土した円筒埴輪
底部から口縁部まで復元することができた円筒埴輪。6条7段。高さ71.5cm。



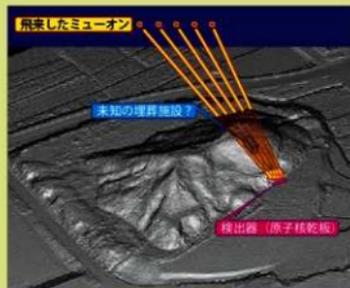
047 西乗鞍古墳 掘割から出土した須恵器大甕
古墳南側の掘割から出土した巨大な須恵器甕。
高さ94.1cm。



048 西乗鞍古墳 採集された土器
昭和57(1982)年に古墳南側の掘割付近で採集された土器類。

にしのおくらふん さいりょうしせつばんさ 西乗鞍古墳の埋葬施設探査

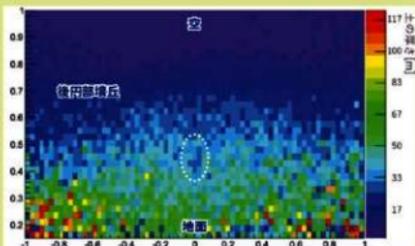
ミュオンラジオグラフィは、宇宙線ミュオンの性質を利用した内部探査技術である。上空から絶えず降り注ぎ、土の厚さに応じて透過する性質のある素粒子（ミュオン）は、地表に設置した特殊なフィルム（ミュオン）は、地表に設置した特殊なフィルムに飛跡を残す。墳丘を貫通したミュオンの飛跡を解析して古墳の内部構造を探る。



049 西乗鞍古墳におけるミュオンラジオグラフィ

西乗鞍古墳のミュオンラジオグラフィによる内部探査は西藤清秀氏・石黒勝己氏らにより実施された。

平成 27～28 (2015～16) 年に西乗鞍古墳の後円部東側に設置したフィルム（原子核乾板）を解析したところ、後円部の上段中央付近の地中に奥行 7 m 前後の空洞が存在する可能性があることが分かった。これまでに発見されていない未知の埋葬施設が、今も後円部の地中に残されているのかもしれない。



050 西乗鞍古墳後円部内部で検出された「空洞」
後円部上段の中央付近で検出された影。
奥行 7 ± 1.1 m、高さ 2.7 ± 0.8 m の「空洞」の反応。

せきひ だいげんすいはいせきまきりつところ 石碑「大元帥陛下駐蹕之處」

西乗鞍古墳の前方部墳頂には「大元帥陛下駐蹕之處」と記された石碑が立っている。

この石碑は、昭和 7 (1932) 年に大阪平野・奈良盆地を中心として実施された陸軍特別大演習の際に、西乗鞍古墳に設置された統監所において昭和天皇が全軍の動静を視察した事績を顕彰することを目的として、昭和 9 (1934) 年に前方部墳頂に設置されたものである。

このほか、前方部の南西裾付近にも「西乗鞍御野立処」の石碑が残されている。



051 石碑「大元帥陛下駐蹕之處」

おほかこふん 小墓古墳

西乗鞍古墳の北西に位置する前方後円墳である。墳丘は前方部を南西に、後円部を北東に向け、周辺の地割に盾形の周濠の痕跡がうかがえる。現状では墳丘の地形が耕作により大きく改変されて本来の墳丘裾が後退してしまっているが、発掘調査成果と航空レーザ測量調査成果を踏まえると、もともとは90 m程度の長さがあったものと想定される。

杣之内浄水場の拡張に伴い、昭和62(1987)年と平成元(1989)年の2次にわたって墳丘東側の発掘調査が天理市教育委員会により実施された。幅12～13 m、深さ2.8 mの周濠が見つかり、多量の埴輪や木製品が出土した。

出土遺物のうち、埴輪には円筒・朝顔形・蓋形・盾形・鞍形・人物・馬形・猪形・水鳥形・鶏形・家形など、木製品には笠形・盾形・大刀形・鬚形・鉢形などがある。これらの木製品は埴輪と同様に古墳の上や周囲に並べられていたようで、「木製の埴輪」とも呼ぶべきものである。このほかに木製の櫛・槌・火鑽・「耳杯形」容器なども見つかった。小墓古墳の築造時期は西乗鞍古墳に後続する古墳時代後期



052 小墓古墳の発掘調査

発掘調査で埋没した周濠を検出。浄水場の拡張工事が発掘調査の契機となった。

前半とみられる。

発掘調査は周濠部分のみにとどまったため埋葬施設に関する情報は得られていないが、周濠から出土した多量かつ多様な埴輪や木製品のなかには、段数の多い円筒埴輪や、円柱を伴う高床式家形埴輪の存在など、小墓古墳を首長墳として位置づけるにふさわしい内容を含んでいる。杣之内古墳群全体のなかでも最も出土遺物の様相が判明している古墳であり、重要な調査成果と言える。



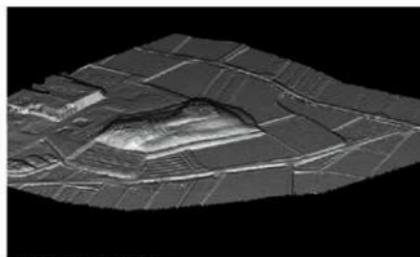
052 空から見た小墓古墳

発掘調査当時の小墓古墳を北から見る。左後方に見えるのが西乗鞍古墳。



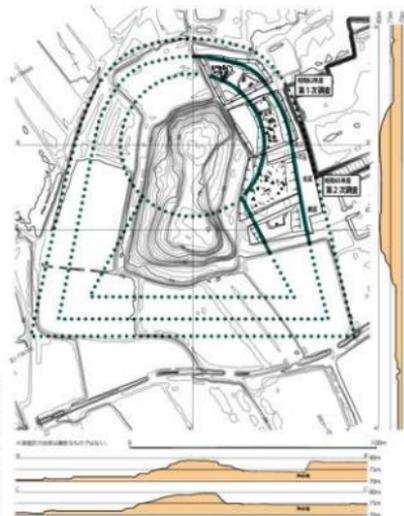
054 小墓古墳 地形起伏図

墳丘の周囲に周濠と外堤が埋没してきた地割の痕跡が残る。墳丘は後世の耕作により段状に改変されている。



055 小墓古墳 地形陰影図

北から俯瞰した様子。周濠と外堤が埋没してきた地割が周囲より高くなっている。



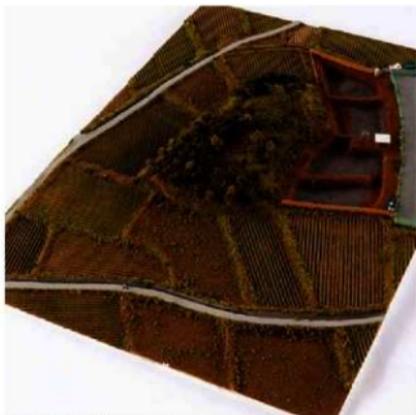
056 小墓古墳 等高線図・断面図

航空レーザ測量により作成した等高線図。周濠の発掘調査の結果、墳丘周辺を取り巻く現況地割ラインが周濠・外堤と一定の対応関係をもつことが判明しており、本来の形状を復元する手がかりになる。発掘調査成果を踏まえて小墓古墳の規模を復元すると、後門部直径は約58m、前方部前面の幅が80m程度、古墳の全長が90m程度となる。



057 小墓古墳 周濠内の遺物出土状況

多量の木製品と埴輪が出土している。この写真が撮影された第1次調査北区は、笠形木製品の出土が特に多かった。



058 小墓古墳 墳丘・周濠模型

周濠部分の4つの調査区の調査状況を再現した模型。実際には4つの調査区を北から順に1か所ずつ発掘していった。



059 小墓古墳 周濠埋土の堆積状況

3 m近い厚さの堆積。一番底の色の濃い部分が古墳時代の埋土で、それより上層は中世以降のもの。



060 小墓古墳 周濠内で検出された陸橋

後円部北東側で周濠内を横断していた陸橋。



061 小墓古墳 円筒埴輪・朝顔形埴輪
円筒埴輪は6条7段以上または5条6段構成で、須恵質焼成のものも含まれている。



063 小墓古墳 鉢の線刻
蓋形埴輪の笠部に施された線刻。



062 小墓古墳 蓋形埴輪
笠部と立飾は文様を失ったシンプルな形態。



064 小墓古墳 円柱を伴う高床式の家形埴輪
円柱を伴う高床式の家形埴輪。格式の高い建物を表現したものであろう。小墓古墳には円柱を伴う家形埴輪が複数存在したことが分かっている。



065 小墓古墳 家形埴輪 屋根



066 小墓古墳 家形埴輪 基部



067 小墓古墳 鳥形埴輪



068 小墓古墳 猪形埴輪



069 小墓古墳 動物埴輪
馬形埴輪の破片が多くを占めている。



070 小墓古墳 背に四足獣を乗せた痕跡のある動物埴輪
背に貼り付けた別個体が剥離した痕跡のある埴輪。子
を食った猿を表現した可能性が指摘されている。

071 小墓古墳 人物埴輪 (盾持人)



072 小墓古墳 甲冑形埴輪と人物埴輪頭部



073 小墓古墳 人物埴輪
巫女、力士、武人など多様な人物埴輪が出土している
が、多くは断片化している。



笠形木製品

圓形木製品

鐙形木製品

大刀形木製品

扇形木製品

074 小墓古墳 木製品

笠形木製品は木製品では最多の合計 85 点出土。コウヤマキ製で、もとは木柱と組み合わせて周濠内に並んでいたらしい。

扇形木製品は表面に連続する三角形の文様を有する。このほか、鐙形、大刀形、鐙形など多様な木製品の出土が報告されている。



075 小墓古墳 周濠底で検出された木柱

2条の木柱列が周濠内に存在したことが判明している。周濠中央付近が 4.5～4.7 m 間隔、墳丘裾付近が約 8 m 間隔。

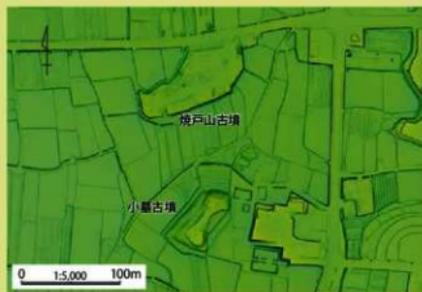


076 小墓古墳 須恵器

周濠から出土した須恵器は 5 世紀末～6 世紀前半のもの。

焼戸山古墳

小墓古墳の北西約 150 m には焼戸山古墳がある。焼戸山古墳は未調査のため詳細が明らかでないが、墳丘状の高まりとそれを取り囲む周濠痕跡状の地割が存在している。周濠痕跡の規模が全長 212 m に及ぶことから、焼戸山古墳が本来は 150 m 級の大型前方後円墳であった可能性も指摘されている。



077 焼戸山古墳と小墓古墳

焼戸山古墳の周辺にも周濠痕跡状の地割がある。

ひがしのりくらくらこふん 東乗鞍古墳

西乗鞍古墳の東方に所在する古墳である。前方部を西南西に向ける上下二段築成の前方後円墳である。測量図からの読み取りでは全長約75m、後円部直径約44m、高さ約10mを測る。前方部は大きく開く形状で、後期古墳の特徴をよく示している。

昭和56(1981)年度にホッケー場建設に先立って奈良県立橿原考古学研究所が墳丘の西側でおこなった発掘調査では、前方部の西側に幅約10m、深さ約2mの周濠があることが分かった。

平成29(2017)年度以降は天理市教育委員会・天理大学が共同で範囲確認調査に取り組んでいる。現在までに後円部東側と前方部西側で墳丘裾と埋没した周濠を確認し、墳丘斜面が上下二段築成であること、古墳の本来の全長が約83mに達することが判明するな

どの成果が上がっている。東乗鞍古墳は墳丘周辺を比較的平坦な地形が取り巻いているが、この地形は西乗鞍古墳同様に周濠と外堤が埋没して形成されたものである可能性が高い。

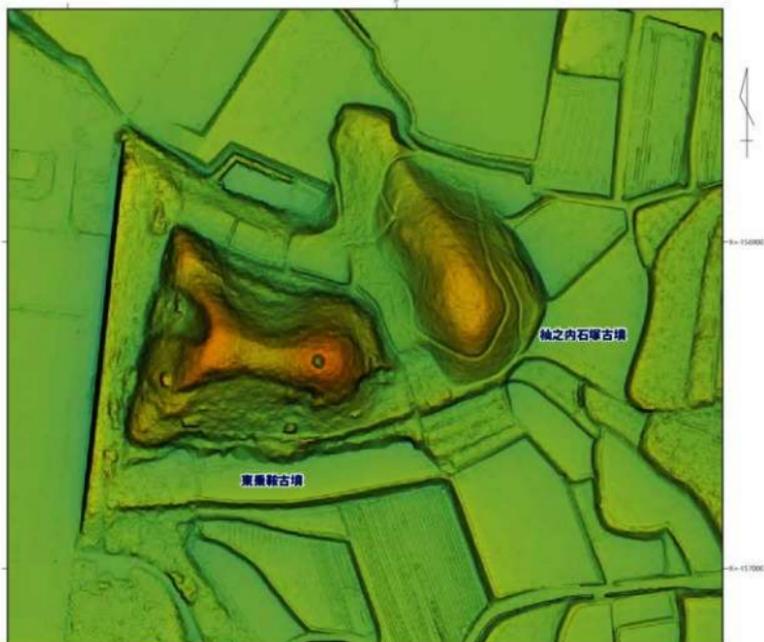
後円部の南側には横穴式石室が古くから開口している。大正2(1913)年におこなわれた佐藤小吉の調査によると、石室は玄室長約7.6mを測る。片袖式の畿内型横穴式石室で、現在は玄室内の奥壁寄りに土砂が流入している。玄室内の奥壁寄りには阿蘇溶結凝灰岩製の割板式家形石棺が土砂に半分埋もれた状態で現存しており、その手前には二上山白色凝灰岩製の組合式石棺の底石が残っている。石室内は盗掘を受けており、かつて挂甲の小札や馬具の杏葉などが出土したとされる。

横穴式石室や石棺の特徴からみて、東乗鞍古墳は古墳時代後期前葉に築造されたもので、小墓古墳に後続するものと考えられる。

078 空から見た東乗鞍古墳

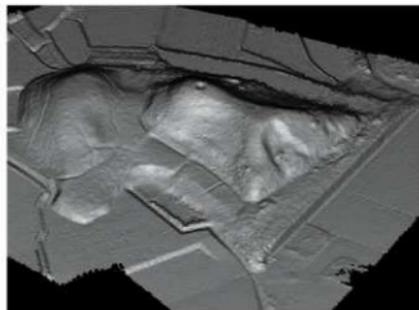
墳丘は竹に覆われている。左方は親里ホッケー場。後方は近年に整備された駐車場。





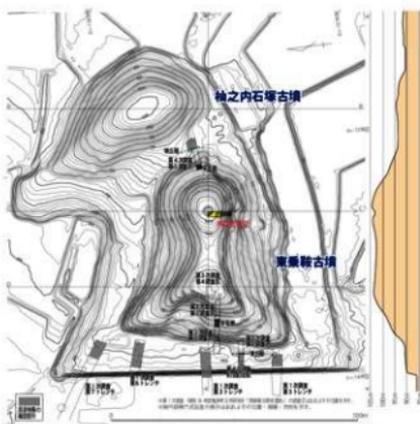
079 東乗鞍古墳 地形起伏図

西乗鞍古墳と同様に周囲より一段高い地形の上に東乗鞍古墳の墳丘が載っている。東乗鞍古墳の東側には袖之内石塚古墳が所在するとされる小山がある。



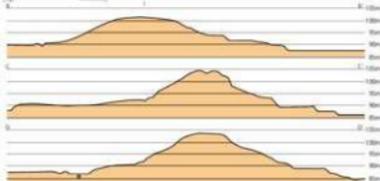
080 東乗鞍古墳 地形陰影図

北西から俯瞰した様子。後円部頂頂の窪みは横穴式石室内への土砂流入によるもの。



081 東乗鞍古墳 等高線図・断面図

航空レーザ測量により作成した等高線図。墳丘の規模は従来全長約75mとされてきたが、発掘調査により83mに達することが判明した。後円部径に対して大きく前方部が広がる平面形である。また、発掘調査により前方部西面や後円部東側で周濠が埋没していることが確認されており、周濠を本来完備していた可能性は高い。



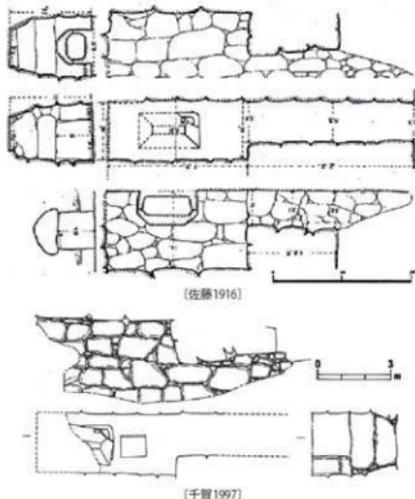


082 東葉鞍古墳 横穴式石室

玄室内の天井付近から土砂が流入している。奥に見えるのが阿蘇溶結凝灰岩製の切抜式家形石棺で、手前左が二上山白色凝灰岩製の組合式石棺の底石。



083 東葉鞍古墳 横穴式石室模型



084 東乗鞍古墳 横穴式石室実測図

東乗鞍古墳の石室は畿内型横穴式石室の代表例の一つ。



086 東乗鞍古墳の発掘調査

天理市教育委員会と天理大学は平成29(2017)年度から東乗鞍古墳の共同調査に取り組んでいる。



085 東乗鞍古墳 鉄製品 (馬具類・小札)

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館が所蔵している鉄製品。最下段が鉄製小札、上段が馬具類である。



087 東乗鞍古墳 後円部東側で検出した周濠

共同調査で見つかった後円部東側の周濠。

袖之内石塚古墳

東乗鞍古墳のすぐ北東に全体が柿畑に覆われた小山があり、袖之内石塚古墳の名がついている。測量調査をおこなった天理大学歴史研究会の報告では、小山全体を墳丘とみなして76m×40mの楕円形の古墳となる可能性が指摘されているが、出土品等は知られておらず詳細は不明である。小山全体ではなく、頂上部に小規模な古墳が存在した可能性も考えられる。



088 北から見た袖之内石塚古墳

全体が柿畑になっている。後方に見えるのは東乗鞍古墳。

Ⅲ 杣之内古墳群の中小古墳

西乗鞍古墳以後、首長墳が相次いで造営されるのとは別に、古墳時代後期に全長 40 m 前後の規模の小さな前方後円墳がつくられている。本章で紹介する笠神山古墳や須川第 1 号墳などである。その被葬者は首長の下で、それぞれの集団を統率する立場にあったのであろう。このほか、杣之内古墳群では多くが削平されているが、保昌塚古墳のような小古墳が散在していたようである。

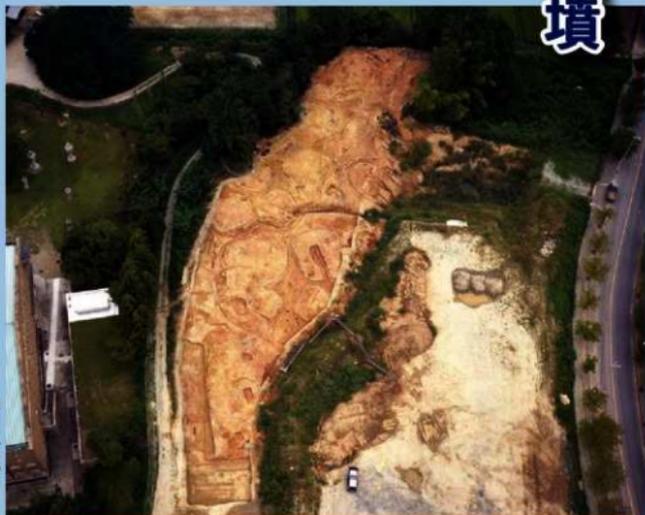
また、西乗鞍古墳が築かれたころには群集墳が出現する。これらは布留遺跡でも、布留川南岸の豪族の居館などが建てられた中心地域に近接して営まれており、西約 400 m の地点にツルクピ古墳群が、浅い谷を隔てた南約 200 m の丘陵上に赤坂古墳群が位置する。

ツルクピ古墳群では直径 10 ～ 14 m の円墳が 5 基検出されている。墳丘はいずれも削平されていて埋葬施設は残されていなかったが、おそらく木棺直葬墳であったと考えられる。これらには埴輪を有するものも認められ、古墳に樹立していたとみられる。

赤坂古墳群は墳丘は削平されていたが、多くが 10 m 以下の小さな古墳で、丘陵上の非常に限られた墓域に 19 基が密集して築かれていた。なかには前代の古墳を壊して古墳を築造する例も認められることや、埴輪を有するものが認められないなど、ツルクピ古墳群との集団間の格差が読み取れる。また、この一群の古墳から南に少し離れた所には小型の前方後円墳（赤坂第 20 号墳）があり、これらの統率者の古墳とみられる。

群集墳は古墳時代後期の横穴式石室の本格的な採用を契機として、墓域を東方の山麓に移し活発な造墓活動を展開する。園原^{（園原）}東方古墳群（水棚古墳群）や石上・豊田古墳群である。

以上のように、杣之内古墳群の中小古墳は、布留の集団内に様々な階層があったことを教えてくれている。



089 空から見た赤坂古墳群
墳丘は既に削平されていたが、調査によって多数の古墳が発見され、集落に近接して初期の群集墳が存在することが明らかとなった。

あかさかひんぐん
赤坂古墳群

赤坂古墳群は布留遺跡の豪族居館などが所在する地域の南の丘陵上に位置する。丘陵の頂上の西側は削平されて崖状をなすが、元はもう少し西にのびていたようである。調査前には、この丘陵上に古墳状の隆起は認められなかったが、調査によって多数の古墳が密集して存在することが明らかとなった。また、古墳群南端の第1号墳から、南に約50mほど離れた所には、全長30mに復元できる前方後円墳の赤坂第20号墳が位置する。

調査の結果、古墳時代中期末から後期にかけての円墳・方墳が19基、古墳時代後期から終末期にかけての木棺墓や土槨墓が5基検出された。

赤坂古墳群は墳丘がすべて削平されていたが、残存

する周溝から古墳の規模や墳形などが明らかとなった。その特徴は大半が直径10m以下の規模の古墳で、周溝を共有して密集して築かれており、その造営集団が劣勢な家族であったことを示している。また、墳丘が削平されているにも関わらず竪穴式小石室が遺存するもの(第1・16・19号墳)があることから、これらが低墳古墳であったことが分かる。これは、その被葬者が群内でもより階層が低かったことを示している。さらに興味深いのは、尾根筋を外れた斜面に方墳が4基(第4・6・7・19号墳)築かれていて、そのうちの第6・7・19号墳に重複関係が認められたことである。これらは同一家族によって順次築造されたものとみられるが、この家族には十分な墓域が与えられず、前代の古墳を壊さなければ新たな造墓ができなかったのである。以上のように、赤坂古墳群では劣勢な造営集団のなかに、さらに階層差をうかがうことができた。

さて、赤坂古墳群の造営集団については、赤坂第17・18号墳の間の周溝から韃羽口や鉄器の原料となる鉄塊、鉄滓が、赤坂第2・4・6・9・20号墳から鉄滓が出土していることから、鍛冶に携った工人との関わりがうかがえる。また、赤坂第14号墳出土の韓式系の甕には、外面に鳥足文のタタキメがみられ、その造営者が百濟系の渡来人であったことを教えてくれている。



090 赤坂古墳群 平面図

丘陵上の狭い墓域に古墳が周溝を共有して、密集して築かれている様子が分かる。



091 赤坂古墳群の方墳(第4・6・7・19号墳)

尾根筋を外れた場所に、方墳が前代の古墳を壊して築造されていた。



092 赤坂第9号墳 須恵器高環・蓋出土状況
古墳の周溝からは須恵器高環と蓋が出土したが、復元すると高環と蓋がセットになって6組が古墳に供献されていたことが分かった。



093 赤坂第9号墳 須恵器高環・蓋
6組の高環・蓋はほぼ同形・同大のものであった。



094 赤坂第17・18号墳間周溝 鑄羽口・鉄塊・鉄滓

鉄滓は鉄素材を整えたり、鉄製品をつくるときにでる残滓、鉄塊は鉄素材、鑄羽口は炉に空気を送る際の吹き込み口である。これらから古墳の被葬者が鍛冶工人であったことが推測される。



095 赤坂第14号墳 韓式系土器

壺の体部には横に連続する鳥足文タタキメが施されている。

ツルクビ古墳群

ツルクビ古墳群は布留川の南岸にあり、現在は削平されて見られないが、かつて存在したツルクビ山の西に位置する。調査区は旧守目堂池ムロムドウ池の北岸と東岸・西岸にあつている。

墳丘は中世に完全に削平されていたが、古墳の周囲に掘られた周溝から5基の円墳の存在が明らかとなった。旧守目堂池の北で円墳4基（第1～4号墳）、西で円墳1基（第5号墳）が検出された。北の4基は近接して東から西に並ぶ。第5号墳は第4号墳の南約50mに位置する。これらで埋葬施設が遺存するものはなかったが、周溝から出土した須恵器から、いずれも古墳時代中期末に築造された木棺直葬墳であったと推測される。

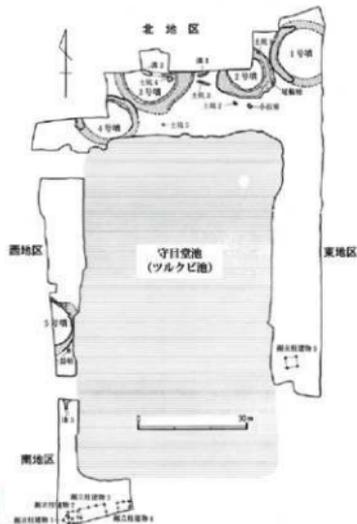
古墳の直径は第1号墳が約14m、第2号墳が約10m、第3号墳が約14m、第4号墳が約13m、第5号墳が約11mである。

第1号墳は群内で最も大きな古墳で、周溝からは多数の円筒埴輪片が出土した。このほか、馬形埴輪が2個体分見られ、うち1個は全体を知ることのできる精巧なつくりのものであった。埴輪のほか、周溝からは坏身・蓋、器台、壺、甕、罌などの須恵器が出土した。坏身・蓋はかなりの量が出土しており、なかには明らかに溝の底に据え置かれたものもあった。

第2号墳は周溝から少量の須恵器の坏身・蓋、高坏、甕、壺、器台と埴輪片が数片出土している。また、古

墳の東部の周溝内で埴輪棺が発見された。埴輪棺は周溝の外側の肩付近に長径0.9m、短径0.5mの楕円形の穴を掘り、口頭部を欠いた朝顔形埴輪と円筒埴輪を向かいあわせにして据えていた。埴輪棺に伴う遺物は出土しなかった。このほか、第2号墳の南に近接した位置から小石室が発見されたが、共存する遺物はなかった。

第3・4号墳は周溝から少量の須恵器と埴輪片が、第5号墳は周溝から少量の須恵器が出土している。また、第5号墳の南東の周溝に近接した位置で土器棺が検出された。高さ約60cmの須恵器の大甕を横位にして土壌に納めたものである。ほかに遺物は検出されなかった。



096 ツルクビ古墳群 平面図

古墳は旧守目堂池の堰の部分で検出された。かなりの古墳が池の掘削で壊されたとみられる。5基の古墳が残されていたが、これらには埴輪棺や小石室、土器棺などが伴っていた。



097 ツルクビ第1～4号墳完掘状況

旧守目堂池の北に残されていた第1～4号墳（手前が第1号墳）。墳丘は完全に削平されていたが、残された周溝により墳形と規模が明らかとなった。



098 ツルクビ第1号墳 須恵器杯身・坏蓋・琺・高坏



099 ツルクビ第1号墳 馬形埴輪



100 ツルクビ第2号墳 周溝内の埴輪棺
口頭部を欠いた朝顔形埴輪と円筒埴輪を向かいあわせにして据えて棺としていた。棺の縦目や両小口はほかの円筒埴輪片を利用して塞いでいた。



101 ツルクビ第2号墳
埴輪棺に利用された朝顔形埴輪(左)と円筒埴輪(右)

実在しなかった「鐘子山古墳」

ツルクビ古墳群の東にあった鐘子山はかつて古墳時代中期の200m以上の大型前方後円墳と考えられていた。鐘子山は明治40年代には既に造成され学校の校舎が建てられていたため、その実態は長らく不明であった。しかし、昭和57～58(1982～83)年の守目堂(ツルクビ)地区の鐘子山古墳の前方部にあたる箇所での調査では、前方後円墳の存在を示すような痕跡はなんら確認されなかったほか、前方部前面の周濠とみられた守目堂池は近世に掘削されたものであることが判明した。また、鐘子山古墳の後円部・くびれ部・前方部の北裾付近にあたる場所での調査(守目堂(鐘子山)地区)でも、前方後円墳の存在をうかがわせる遺構は検出されず、かえって古墳時代後期の多数の円筒埴輪片や5世紀末から6世紀後半の須恵器片が出土した。

これらは鐘子山から落下したものと考えられたことから、鐘子山は大型の前方後円墳ではなく、ここには、かつて複数の小古墳が存在したものと結論づけられた。

ツルクビ古墳群から東の鐘子山にかけての地域には、群集墳が造営されていたのである。



102 鐘子山付近の航空写真
昭和21(1946)年に米軍が撮影した航空写真には、現在では削平された鐘子山に立ち並ぶ校舎が写り、その西には守目堂池が見える。東端で山裾を弧状に回り込む道が後円部とみなされたのであろうか。



103 守目堂(ツルクビ)・守目堂(鐘子山)地区調査位置図

かさかみやまこじん 笠神山古墳

明治時代から「カサカミ山」として知られていた古墳であるが、標高 117 m の丘陵上に築かれており、樹木が繁って見通しが悪く、墳形・埋葬施設とも不明なまま詳しい調査はおこなわれていなかった。昭和 53・54 (1978・79) 年に天理大学歴史研究会が踏査をおこなった際に埴輪片が見つかり、採集地点の位置関係から前方後円墳である可能性が指摘された。その後平成 2 (1990) 年には同研究会が測量調査をおこない、墳丘は大きく崩れているが後円部径約 22 m、全長約 45 m の前方後円墳で、横穴式石室があったと推定されている。

測量調査の際に採集された埴輪はいずれも円筒埴輪で、ほかに挂甲ツルカサの小札コシラも見つかっている。埴輪の特徴から古墳の時期は古墳時代後期中葉と考えられる。



104 笠神山古墳 墳丘測量図

後円部南西極付近で人頭大の花崗岩が確認されており、横穴式石室の存在が推定されている。



105 竹に覆われた笠神山古墳の後円部
墳丘は大きく崩れており、測量図のL字形の溝を目印に上らないと分かりづらい。



106 笠神山古墳 採集された円筒埴輪
いろいろな胎土、色調の埴輪が見られる。

すがわ 須川第1～3号墳

西乗鞍古墳の北東 300 m、幾坂池ヒコノサカの北の丘陵上に位置する。丘陵頂部の東に西向きの前方後円墳である須川第1号墳が、その西に円墳の須川第2号墳が所在する。また、この丘陵頂部から南西に下る尾根上に円墳の須川第3号墳がある。

須川第1号墳は改変が著しかったが、後円部では地山を3段に削り出している様子が観察された。古墳の全長は37.5mある。埋葬施設は後円部に木棺を直葬したものであるが、木棺の2分の1は削平されていた。木棺を納めた墓壇は残存長1.4m、幅1m、深さ1～1.4mあり、碧玉製管玉6点、ガラス製小玉20点が出土した。墳丘からは埴輪のほか、ミニチュアの鉄斧1点、滑石製紡錘車1点、須恵器、土師器が出土している。埴輪は後円部の裾に点在するほか、くびれ部から集中して出土した。円筒埴輪のほか、蓋・盾・馬形埴輪、人物埴輪がある。また、後円部の南東部には須恵器坏身・坏蓋が2セットと土師器高坏が埋置されていた。出土した須恵器から6世紀前半の時期が考えられている。

須川第2号墳は削平が著しく、頂部から埋葬施設も検出されなかった。主だった遺物も出土しなかったが、高まりの残存状況から直径13mの円墳とされる。

須川第3号墳は墳丘が削平されていたが、墳丘裾の周溝から直径15mの円墳と考えられている。周溝からは須恵器坏身・坏蓋が出土しており、6世紀中葉の時期とみられている。また、ここでは平安時代末の火葬墓が検出された。



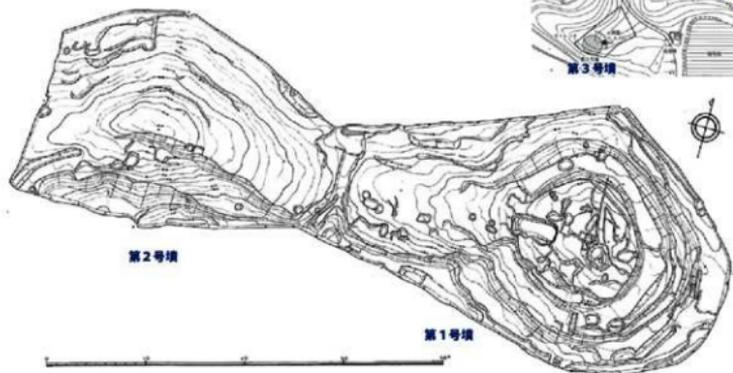
107 須川第1号墳 埴輪出土状況
くびれ部を中心に、円筒埴輪や蓋・盾・馬形埴輪、人物埴輪が墳丘の裾周りに出土した。



108 須川第1号墳 発掘状況
後円部が地山を3段に削り出して築造されている様子がわかる。

109 須川地区 平面図

平成元～2（1989～90）年の発掘調査により尾根筋上で前方後円墳1基、円墳2基が見つかり、調査後に削平された。跡地では現在「なら歴史芸術文化村」の建設が進められている。



110 須川第1・2号墳 丘測量図

須川第1号墳は地山を削り出して墳丘を前方後円形に整えている様子が分かる。前方部前面の掘削で第2号墳の丘陵と画されている。



111 須川第1号墳 石製品・ガラス玉

最上段左端：滑石製紡錘車、同右：碧玉製管玉
他：ガラス製小玉



112 須川第1号墳 須恵器・埴輪

須恵器坏身と蓋はセットとなって、後円部南東部に土師器高坏とともに埋置されていた。右は蓋形埴輪の立飾。

ウテビ山第1～3号墳

ウテビ山は東からのびる丘陵の先端にあった、南北70 m、東西90 m、比高差12 mの独立丘陵状の場所で、明治時代に頂上にあった石室から大きな石を掘り出したと伝えられるなど、横穴式石室や石棺を有する古墳が何基が存在することは分かっていた。昭和33(1958)年発行の『天理市史』では、横穴式石室がある円墳が3基と埋葬施設不明の円墳2基の、計5基の円墳が記載されている。

昭和50(1975)年におこなわれた発掘調査では3

基の古墳が確認され、土器類と鉄刀、馬具などが出土した。第2号墳は直径16～20 mの円墳で、長さ7 mの横穴式石室があったと考えられている。発掘調査の後、ウテビ山全体が削平されて消滅した。

発掘調査より前にウテビ山の南斜面で石棺の破片が見つかったが、発見位置が第2号墳から離れていたこと、第2号墳からは石棺の破片は出土しなかったことから、第1号墳または第3号墳にあったものと推定されている。香芝市二上山産出の凝灰岩製の組合式石棺の底石で、一辺に石棺の側石を置くための高さ約1 cmの段が、ほかの辺には隣り合う底石と組み合わせるための高さ5 cmの段がある。



113 削平される前のウテビ山
昭和43(1968)年撮影。現在は親里競技場になっている。



114 ウテビ山第1号墳 石室の石積み
昭和43(1968)年撮影。昭和50(1975)年の発掘調査時には第1号墳は消滅していた。



115 ウテビ山第2号墳 須恵器
右の高坪の蓋は口径18.2cmと大型で、天井部内面に同心円の当て具痕がある。



116 ウテビ山第1号墳または第3号墳 組合式石棺片
大きさは50×57×15cm。

てんりさんこうかんしよぶろ　きまのうちのしつづひん 天理参考館所蔵の袖之内出土品

天理参考館には袖之内から出土したという所蔵品が何点がある。現在は古墳がない場所が出土地点になっているものがあるので、姿を消した古墳の手がかりになるかもしれない。

天理大学1号棟裏出土　台付長頸壺

昭和初期に所蔵された古墳時代後期の須恵器であるが、出土時期や出土状況は不明である。

天理大学1号棟周辺の字名は御立で、大正3（1914）年発行の『大和山邊郡誌』には、御立古墳が載っているが、その後消滅したようである。この須恵器との関係は分からない。

天理高校グラウンド出土品

天理高校のグラウンドは、現在の本校舎が昭和12（1937）年に竣工するのに合わせて整備された。北と



117 天理参考館所蔵 袖之内出土須恵器

左：天理大学1号棟裏　中央：天理高校北グラウンド
右：天理高校グラウンド

南に分かれており、合わせて南北約200m、東西約150mの広さである。南グラウンドの南端は小半塚塚古墳の西に隣接する位置関係となる。明治時代以降の記録には、天理高校グラウンドの場所に古墳は記されていないが、これらの出土品から、かつては小規模な古墳がいくつかあった可能性が考えられる。

天理高校北グラウンド出土　琿と短頸壺　どちらも天理高校北グラウンドの北の方から昭和37（1962）年に出土したという記録がある。まとめて一緒に出土したのではないと考えられる。

坏身と短頸壺　短頸壺には「海軍工事中天理高グラウンド　昭和19年出土」という墨書きがある。小半塚塚古墳が壊された工事と一連の工事であろう。

円筒埴輪　出土状況や2点が同時に出土したかどうかは不明である。どちらも各段に2個ずつ円形の透孔がある。



118 天理参考館所蔵 天理高校グラウンド出土円筒埴輪

いずれも昭和33（1958）年以前に天理参考館所蔵となっている。

ほうちょうづかかふん 保昌塚古墳

西山古墳の約300m東側にあるこんもりと腰高な円墳で、鎌倉時代に近くに住んでいた刀の名工、保昌（または法性・宝性）五郎の墓という言い伝えから、古墳の名前がついている。横穴式石室や石棺があるという記録があるが定かではなく、出土品も知られていない。触ると祟るといふ言い伝えもあったためであろう。

発掘調査は実施されていないが、平成12（2000）年に天理大学歴史研究会が測量と電気・レーダー探査をおこない、現状での大きさが判明した。



119 北から見た保昌塚古墳

天理大学歴史研究会の測量調査によると直径16.8m、高さ4mの円墳。

IV 柚之内古墳群の終焉

前方後円墳の造営が停止した古墳時代終末期には、天皇、皇族、有力氏族の首長など高位の人物の墓は円墳や方墳に変化した。たとえば推古天皇と竹田皇子の合葬墓の可能性のある橿原市の植山古墳と、蘇我馬子の墓と考えられる明日香村の石舞台古墳は、ともに大型の方墳である。

古墳時代終末期、柚之内古墳群には傑出した大きさの円墳、塚穴山古墳が築かれた。墳丘、石室ともに、石舞台古墳に匹敵する規模を誇る。また塚穴山古墳に続く峯塚古墳は精美な切石積みの横穴式石室を有する円墳で、墳丘には近くで産出する凝灰岩質砂岩（天理砂岩）をレンガのように敷き詰めている。天理砂岩は斉明期に築かれた明日香村の酒船石遺跡にも大量に用いられており、産出地の有力者であった峯塚古墳の被葬者と政権との強いつながりが想像できる。峯塚古墳の副葬品は知られていないが、隣接する古墳から出土したという銀装の装飾大刀が知られており、峯塚古墳の副葬品を想起させる。柚之内古墳群における首長墳の造営は、物部氏の権勢を示しながら古墳時代の終わりまで続いたのであった。

また日本書紀には、天武期に物部氏は石上氏と氏名を変え、石上麻呂は左大臣の位まで上り詰めたことが記されている。

柚之内古墳群を見渡せる東方の丘陵上で見つかった柚之内火葬墓からは、中国唐代の海獣葡萄鏡と銀製のかんざしが出土した。奈良時代の高位の貴族の墓と考えられ、一族の繁栄は奈良時代にも続いていたことが分かる。



つかあやまこじん 塚穴山古墳

西山古墳の北側に隣接する大型円墳である。南半分は墳丘と周濠が比較的原形をとどめている。横穴式石室は南向きで、天井石がすべてなくなって巨石が露出している。

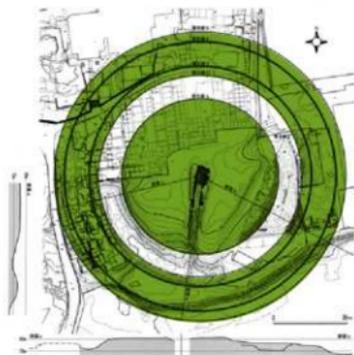
明治時代以降、塚穴山古墳は前方後円墳と考えられていた。埋葬施設や出土品などの情報はなく、ただ幕末ごろに後円部の「塚穴」から多数の石を掘り出したという伝えと、南向きの大きな横穴が墳丘に掘られていることが記録されている程度であった。昭和33(1958)年刊行の『天理市史』史料集では、地図に西向きの方後円墳を描き、一覧表には「全長55m 周濠あり横穴式石室破壊」と記している。

発掘調査

昭和初期に古墳の周辺は天理高校の校地となったが、そのころには石室が見た目に分からないほどにすっかり埋まっていた。昭和39(1964)年、天理高校の寮建設に際して石室が姿を現したため、はじめての墳丘測量及び埋葬施設の発掘調査がおこなわれた。

調査によって、墳丘は直径約65mの円墳で幅約13mの周濠がめぐること、埋葬施設は全長約17mの巨大な横穴式石室で、墳丘、石室ともに明日香の石舞台古墳に匹敵する規模であることが判明した。

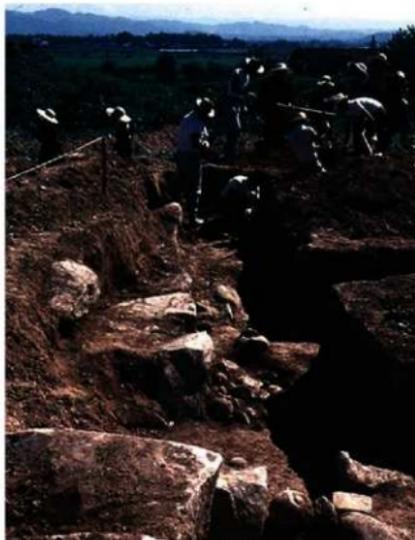
石室の天井石は失われているが、玄室は奥壁の高さが3.7m、長さ7m、幅3.1mである。床には表面の



121 塚穴山古墳 墳丘測量図

平成26(2014)年におこなわれた石室の三次元レーザースキャンニング測量と墳丘のトータルステーション測量の成果。

平らな石を敷き詰め、周囲に幅20cm、深さ30cmの溝をめぐらせている。玄室の中央には幅70cm、深さ30cmの排水溝が暗渠となって縦貫しており、周囲の溝とつながる。羨道は入口付近が壊れているが、長さ9.5m、幅2.6mで床面は玄室より30cm低く、礫を敷き詰める。排水溝は玄室から羨道中央を縦貫して周濠に至る。羨道入口から周濠までの前庭部では、粘土を叩き締めた面が検出されたが、調査は羨道の幅でしかおこなわれなかったため、その面の広がり是不明である。



122 塚穴山古墳 姿を現しつつある石室

昭和39(1964)年の調査時に奥壁側から撮影。まだ側壁の石の上面しか見えておらず、内部に水輪が転がっている。



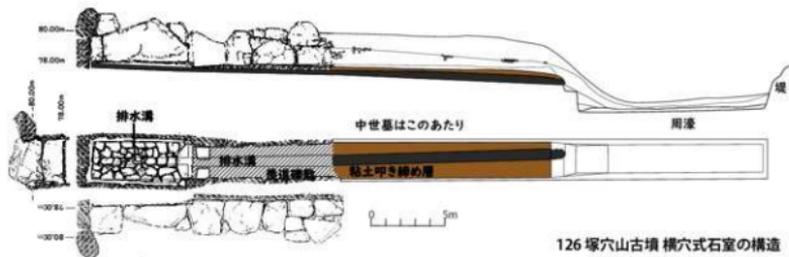
123 塚穴山古墳 玄室入口付近の床面

羨道の礫敷の下に中央の60cmをあけるように左右から方形の石が設置されていた。



125 塚穴山古墳 横穴式石室模型

124 塚穴山古墳 横穴式石室と前庭部の排水溝
昭和 39 (1964) 年の調査時に排水溝端から奥壁
を撮影。羨道床面より玄室床面が高い。



126 塚穴山古墳 横穴式石室の構造



127 塚穴山古墳現在の横穴式石室
発掘調査で検出した奥壁の礎石が今も残
存し、覆われている。



128 塚穴山古墳 家形石椁片
 二上山で産出する凝灰岩製の家形石椁。表面を赤く塗る。赤色は2色使われている。

昭和 63 (1988) 年には墳丘南東裾周辺の発掘調査がおこなわれて周濠と外堤を検出した。周濠からは古墳時代中期末から後期にかけての多数の須恵器や埴輪片が出土したが、古墳の年代を確定できるものではない。また多数の中近世の墳墓がみつかり、五輪塔の部材が出土した。

さらに平成 26 (2014) 年には石室の三次元レーザースキャンニング測量と墳丘のトータルステーション測量がおこなわれた。詳細な検討の結果、墳丘の直径 63.4 m、周濠は幅 9.5 m、外堤の外径は 110 m と復元されている。

昭和 39 (1964) 年の発掘調査出土遺物

昭和 39 (1964) 年の調査では、表面を赤く塗った凝灰岩製家形石椁の破片、土器、銀糸巻鉄刀柄片、鉄鎌が石室から出土した。ただしほかの時代の遺物と混じり合う状態で出土したため、古墳造営当時の状況は分からない。また銀糸巻鉄刀柄片は現存しない。

石室からは黒色土器、瓦器碗、蔵骨器に転用した羽釜、宋銭、寛永通宝など、中近世の遺物も出土した。なかでも瓦器碗などの中世の土器は大量に出土した。さらに前庭部では 5 基の中世墓を検出した。中世墓の蔵骨器には、羽釜と火消壺形蔵骨器が使われていた。また墳丘からは多数の五輪塔・石仏などの仏教石造品



129 塚穴山古墳 土師器高環
 写真 130 の高環。脚部を面取りしている。7 世紀のもの。



130 塚穴山古墳 土師器高環の出土状況
 すく横から中世の瓦器碗が出土。

が出土した。現存する出土品では五輪塔の部材が最も多く、約 380 点ある。一石五輪塔と舟形五輪塔は合わせて約 25 点あり、室町時代から江戸時代初期の年号が確認できる。さらに宝篋印塔ほうくわいんとうの部材や、石仏約 90 点も現存する。

黒色土器は土師器に煤を吸着させて水漏れを防ぐ工夫をした土器で、奈良時代の 8 世紀の終わりごろに内面だけに煤を吸着させたものが考え出され、平安時代の 10 世紀中ごろから 11 世紀には内外面ともに煤を吸着させるようになった。そして 11 世紀にはさらに細かい土で薄く焼き上げた瓦器が作り出されて黒色土器に取って代わり、14 世紀まで使われた。

写真 131 の黒色土器は内面だけ黒いので、8 世紀末から 10 世紀ごろの平安時代の土器である。瓦器塚は 12 世紀から 13 世紀の鎌倉時代のもので、塚穴山古墳の石室は、平安時代から鎌倉時代ごろには人が出入りできる状態になっていたことが分かる。

発掘調査時の写真を見ると、調査の早い段階から五輪塔の部材が次々に出土していた様子が分かる。また前庭部の中世墓の周囲には、火輪や水輪がいくつも写っている。墓標に水輪を据えた墓も見られる。蔵骨器は羽釜を転用した例が多く、現存する羽釜には中に焼骨が入っているものもある。羽釜の時期はおおむね 15 世紀ごろである。また 16 世紀以降に用いられた、火消壺形蔵骨器も何点か出土している。



131 塚穴山古墳 黒色土器・瓦器塚
出土した瓦器塚は 12 世紀のものが多い。



132 塚穴山古墳 羽釜を転用した蔵骨器
いずれも調査時の写真とは一致せず、詳しい出土地点は不明。羽釜の破片はほかにも多数出土している。



133 塚穴山古墳 五輪塔の水輪をのせた中世墓
前庭部で見つかった中世墓のひとつ。奥の壁際や右側にも水輪が写っている。



134 塚穴山古墳 羽釜を蔵骨器に転用した中世墓
それぞれに白い石を伴う。羨道入口前という記録があるが詳細不明。



135 塚穴山古墳 火消壺形藏骨器
写真前列の蓋と後列右の身が写真 138 に写っている。



136 塚穴山古墳 陶器壺を転用した藏骨器
大和では羽釜を藏骨器に転用することが多く、陶器の壺を転用した藏骨器は少数である。

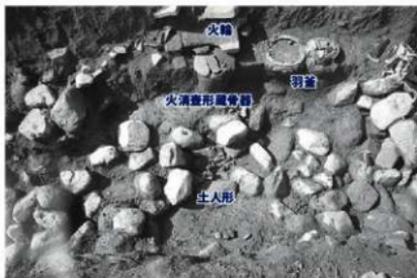
土人形 前庭部の中世墓の前で、約 30cm 低い地面の石囲いの中から人形と馬形の土人形約 35 片がまとまって出土した。一部は接合ができて人形になったが接合できない破片が多数あるため、元はもっとたくさんの人形があって、壊れたものをまとめて置いたと考えられる。

人形は脚を広げて踏ん張り、手を挙げて体操をするかのような姿である。頭が尖っていて、鼻と耳があるものとなないものが見られる。

馬形は人形出土地点の約 1m 東側で、石囲いの外側から頭部、胴体など 4 片が出土した。4 片は接合せず、人形の破片と一緒に石囲いの中にあつた脚の破片が胴体と接合した。馬の頭部と尾、馬の脚と思われる破片も石囲いの中から出土しており、人形と馬形は同時に置かれたと思われる。

人形や馬形の土製品は、奈良時代に水に関わる祭祀

に土馬を使うことが最も多く知られており、それ以外には古墳時代から平安時代まで、山上や峠などの祭祀の場や墓から出土した例があるが、中世墓の例は少ない。壊れたものを墓前にまとめて置いたという状況が分かる例もほとんどないため、貴重な資料である。



138 塚穴山古墳 中世墓と土人形の出土状況
火消壺形藏骨器を使った中世墓と羽釜を使った中世墓が並ぶ。火消壺形藏骨器の上に五輪塔の火輪が見える。

137 塚穴山古墳 土人形
ほかに人の頭部 2 点、馬の頭部 1 点がある。



139 塚穴山古墳 土人形の出土状況



140 塚穴山古墳 宝篋印塔など
宝篋印塔は相輪と笠、反花座約 20 点が現存。



141 塚穴山古墳 五輪塔
地輪に「妙珍」と刻む。



142 塚穴山古墳 箱式石仏
石仏約 50、石仏の屋根約 40 点が現存。

発掘調査以前の出土遺物

羽釜、火消壺形蔵骨器ともに昭和 39（1964）年の発掘調査以前に塚穴山古墳周辺から出土したものである。中世の墓地在墳丘の外側まで広がっていた可能性

を示すものであろう。火消壺形蔵骨器は口径 47cm、高さ 34cm と大型である。羽釜を転用した蔵骨器をこのような大型の容器に納め、何かで蓋をして埋める場合もあった。



143 塚穴山古墳 羽釜を転用した蔵骨器（発掘調査以前の出土）



144 塚穴山古墳 火消壺形蔵骨器（発掘調査以前の出土）
火消壺形蔵骨器は口径、高さとも 20～30cm のものが多く、これは大型。

塚穴山古墳 今日までの歴史

古墳時代終末期、杣之内に造営された塚穴山古墳は、まさに物部氏の揺るぎない繁栄を表す立派な墓だった。しかしその後長い時を経ることなく、平安時代には石室に人が出入りする状態になり、中世には墳丘に何百もの五輪塔や宝篋印塔が立ち並ぶ、人々の祈りの場となった。

やがて塔の部材を適宜利用しつつ、いくつもの墓が墳丘にも石室にも造営された。蔵骨器は羽釜をはじめ火消壺形蔵骨器、陶器の壺と多様である。近隣集落の

主要な墓地として、大切な場所であり続けたのだろう。500 点を上回る仏教石造品が出土していることから、県内有数の中世墓地だったと言える。

しかし中世末の動乱のなかで、墳丘全体が荒れて人が訪れなくなったらしく、江戸時代以降の遺物は極端に少ない。むしろ石を掘り出して利用するために行くような、寂れた場所になってしまったようである。その後、発掘調査がおこなわれるまで塚穴山古墳は本来の姿を隠してしまった。

現在は、墳丘・石室ともに保全が図られている。

みづがこふん 峯塚古墳

東からのびた尾根の南裾に位置する円墳である。明治時代以降、袖之内字墓山にある巨石積みの石室を有する古墳として知られてきた。名称は「峯堂の塚」「墓山」「大墓」と一定しなかったが、舒明天皇陵の改葬陵と推定されたこともある。

昭和45(1970)年に天理大学歴史研究会が測量調査をおこなった。尾根の裾をえぐって円い墳形を造り出していることが測量図から見て取れる。墳丘は3段に築かれており、直径は下の段から35.5m、28.4m、17.6mで、比高は約8mある。調査当時、上の段には切石を隙間なく並べた墓石が認められた。

切石を用いた横穴式石室が南向きに開口している。全長約11.1m、奥壁の幅約2.6m、玄室の長さ約4.5m、高さ2.5m、羨道の高さ1.7mという大きな石室である。明治時代にはその大きさが記録されているので、古くから開口していたようである。個々の切石も巨大であり、玄室右壁の上段は長さ約4.5mの1石で構築されている。

副葬品や棺は残っていないが、塚穴山古墳に続いて袖之内古墳群の古墳時代終末期を飾った古墳である。



145 峯塚古墳 墳丘測量図

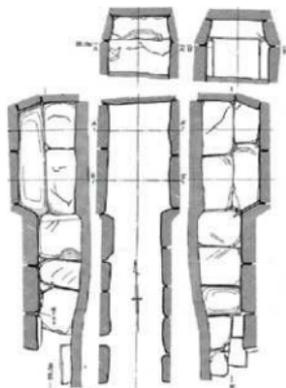


146 峯塚古墳 墳丘の墓石

隙間なく敷き詰められた墓石。昭和45(1970)年撮影。

147 南から見た峯塚古墳

昭和63(1988)年撮影。現在は竹が繁茂しており、このように墳丘を観察することはできない。



148 峯塚古墳 横穴式石室実測図

墳丘の上位に施されていた葺石は約2km北で産出する凝灰岩質砂岩（天理砂岩）を加工したもので、大半は方形で一部L字形に成形したこともある。大きさは15～40cm、厚さは8cmほどである。表面は凹凸なく丸く、隣の石と接する側面は平面に仕上げているが、下になる面には凹凸が残っており、ノミの痕が見られるものもある。写真149の左奥は横断面が台形で、狭い方の面にはノミの痕が残るが広い方の面は凹凸なく丸いため、そちらが表面だったと考えられる。右奥は方形の一角を削り取っている。石を葺いた時には古墳が美しい半球形になるように、墳丘上で調整しながら作業を進めた様子が分かる。



149 峯塚古墳 葺石（天理砂岩）



150 峯塚古墳 葺石のノミ痕
写真149手前の石の裏面。ノミ痕の幅は1.5cm。



151 峯塚古墳 横穴式石室模型

152 峯塚古墳 横穴式石室
花崗岩の精緻な切石による
巨石積の横穴式石室。



ほかのまゝ 墓ノ前の古墳

大正3(1914)年発行の『大和山邊郡誌』では、峯塚古墳を「墓山」または「大墓」と呼び、明治40(1907)年に「南畔の陪塚の如きもの」から刀剣や土器が出土したと記している。さらに周辺は共同墓地で墓の前池という池があるとも記している。また昭和33(1958)年発行の『天理市史』では、袖之内字墓の前の古墳から剣が出土したとして、地図では峯塚古墳の西側に円墳を記す。南側と西側の違いはあるが、これは『大和山邊郡誌』と同じ事柄を表すと思われる。現在この古墳は残っていないが、奈良県の遺跡地図には、峯塚古墳の西側の袖之内町字墓ノ前に刀剣が出土したという古墳が載っている。

東京国立博物館に、山辺郡丹波市町大字袖之内字松原(現在の天理市袖之内町)出土という耳環と鉄刀が所蔵されている。明治40(1907)年5月9日



153 峯塚古墳付近の小学
緑丸が峯塚古墳。周辺に「松原」「墓ノ前」がある。

155 墓ノ前出土 圭頭大刀
(東京国立博物館蔵)



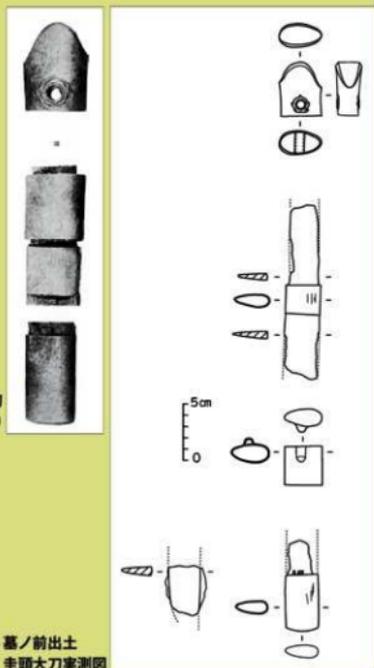
154 墓ノ前出土 耳環 (東京国立博物館蔵)

出典: ColBase (<http://colbase.nich.go.jp>)

に地元で開墾中出土したもので、一緒に出土した鉄刀片と鉄鍬一括、土器11点は地元に戻却したという記録を伴う。出土時期と出土品の内容が『大和山邊郡誌』と一致する。また峯塚古墳周辺の字名を見ると、松原の南側に墓ノ前がある。そこで、松原出土というこれらの資料は、『大和山邊郡誌』に記載される、峯塚古墳の「陪塚の如き」古墳から出土した遺物だと考えられる。

現在耳環は「墓ノ前古墳出土」として国立博物館所蔵品統合検索システムで画像を見ることができ。鉄刀は切先の破片が1点と、古墳時代終末期の銀装圭頭大刀の柄頭と鞘の飾金具、柄の葛巻用の金糸である。

峯塚古墳の辺りにあったこの古墳は「陪塚の如きもの」という記述から、直径35.5mの峯塚古墳よりは小さな古墳だったのであろう。また石室や棺についての記録が残っていないので、埋葬施設も峯塚古墳ほどの規模ではなかったのかもしれない。



156 墓ノ前出土
圭頭大刀実測図

そのうちのひとつは 杣之内火葬墓

杣之内火葬墓は園原町から幾帳池に向けてのびる丘陵の尾根筋を少し外れた南斜面に位置する。調査によってはじめてその存在が明らかとなった。

火葬墓の構築にあたっては、まず、南西に開く、直径10.36m、深さ1.5mの半円形の掘り込み（1段目掘り方）をおこない、さらにその中央に1辺3.2m、深さ0.6mの方形の掘り込みがおこなわれている（2段目掘り方）。1段目掘り方は砂質土と粘土・粘質土を交互に積んだ版築により堅固に埋め戻している。2段目掘り方は主として粘土の混じった砂質土を積んでいる。

版築が完了した後、1.3×1.4m、深さ0.9mの方形の墓塚が掘り込まれている。墓塚からは2種類の木材が出土しており、これらはコヤマキ製の長さ67.9cm、幅約45cmの割抜式の身にスギの板材の蓋が被せられた木櫃であったと考えられている。

木櫃からは火葬骨に交じって細い管状の銀製品と鳩目形金具が、また、木櫃の外からは墓塚の壁際で海獣葡萄鏡が出土した。

管状の銀製品はつなぎ合わせると長さ約10cmの釵子と呼ばれるかんざしであることが分かった。この釵子は純度98.6%の銀製で火葬の際の熱で一部が溶けていた。



157 杣之内火葬墓 地形模型
周辺地形を表現した埋蔵文化財天理教訓査田所蔵の模型。

海獣葡萄鏡は直径12.1cmあり、全体に葡萄の蔓に覆われ、外区には飛翔する鳥6羽、蔓にとまる鳥6羽と蝶が2匹配されており、大変華麗な図像となっている。出土した時点で鏡は漆黒色を呈していた。しかし、分析するとこれは銅67%、錫27%、鉛4.8%の白銅鏡で、唐からの舶載品と考えられている。形式的な特徴からその製作年代は8世紀前半～中葉とされている。杣之内火葬墓の築造年代については、出土土器が小片で、年代の決定できるものはなかった。その被葬者は純度の高い銀製の釵子や舶載の海獣葡萄鏡の存在、火葬墓の構築法などから奈良時代の高位の貴族であったと考えられる。



158 杣之内火葬墓 全景
半円形の掘り込みをおこない、版築で強固に穴を埋め戻してから、改めて木櫃を納めるための方形の穴が中央に掘られている。



159 袖之内火葬墓 木櫃を納めた墓壙と海獣葡萄鏡出土状況
木櫃からは火葬骨と被葬者が身に着けていたとみられる銀製の釵子（かんざし）が、木櫃の北西の墓壙壁際からは海獣葡萄鏡が出土した。

160 袖之内火葬墓 断面

半円形の掘り込みは、砂質土と粘土・粘質土を交互に積んだ版築により埋め戻している。版築は粘土の1単位の厚さが5～8cmあって、大変堅固なものである。





161 袖之内火葬墓 銅製網子
火葬の際、熱で一部が溶解している。



162 袖之内火葬墓 海獣葡萄鏡部分拡大



163 袖之内火葬墓 海獣葡萄鏡部分拡大
飛翔する鳥と墓にとまり羽を休める鳥の間には、
飛翔する蝶が配されている。



164 袖之内火葬墓 海獣葡萄鏡
全体が漆黒色を呈するが、これは土中で錆化したものではなく人工的に薬液を用いて黒染めしたものと考察されている。右下の欠けた部分が白銅色を呈しているが、これが本来の色である。

参考文献

I 畿内古墳群

- 日野正 1985 『大和における首長系群の一側—畿内古墳群の首長墓の変遷—』(『天理大学紀』第 145 輯) 天理大学
- 藤田博樹 1989 『布直遺跡出土の埴輪』(『天理大学紀』第 145 輯) 天理大学
- 山内紀綱 2001 『近畿東部古墳』(『大和前方後円墳集』) 藤原考古学研究所研究成果第 4 冊
- 藤田博樹 2002 『奈良盆地東部部の古墳』(『大和の古墳』) 新編近畿古墳の考古学第 2 巻
- 日野正 編 2012 『大布直遺跡—物部氏系長墓を語る—』第 65 回天理大学紀(学) 天理大学出版部
- 山内紀綱 編 2014 『畿内古墳群の研究』畿内古墳群研究会
- 小田木太治 1914 『畿内古墳群の地理環境』(『畿内古墳群の研究』) 畿内古墳群研究会
- 藤田博樹 2014 『畿内古墳群—2つの文化の邂逅—』(『畿内古墳群の研究』) 畿内古墳群研究会
- 石田大輔 編 2016 『畿内古墳群』西成書局。『天理市埋蔵文化財調査報告』第 10 巻
- 白石太郎 1977 『古墳からみた物部氏』(『大和の古墳』) 新編近畿古墳の考古学第 2 巻
- 日野正 2019 『物部氏の拠点集—布直遺跡—』(『畿内古墳群の研究』) 天理大学出版部
- 小塚明博 2019 『物部氏の古墳 6 基の群像解剖—福山古墳・ダンゴ塚古墳・別所塚古墳・新所大塚古墳・石上大塚古墳—』(『和の考古学—藤田和幸さん追悼論文集—』) 考古学論集第 1 巻 ナベの会
- 小塚明博・小塚祥 2019 『布直遺跡跡跡の大塚古墳の埋葬構造』(『白石太郎先生追悼論文集—古墳—』) 古墳形成の諸問題』白石太郎先生追悼論文集編集委員会編 山川出版社
- 油田保良 編 2020 『大布直遺跡における歴史的地景の復元』研究紀要第 24 巻 奈良古代文化研究会
- 石田大輔 2020 『布直遺跡の古墳群』(『大和布直遺跡における歴史的地景の復元』) 奈良古代文化研究会

II 畿内古墳群の形成

- 上田三三 1927 『奈良朝に於ける古墳史』第 1 冊 史蹟調査報告第 3 内務省
- 富田健爾 1974 『大和の前方後円墳』(『考古学』第 59 巻) 第 4 号
- 竹谷俊夫 1991 『環山古墳の発掘調査』『発掘調査』20 年 埋蔵文化財天理調査団
- 木村明博 1996 『環山古墳の調査』(『天理市埋蔵文化財調査報告』平成 4—5 年度)
- 竹谷俊夫・藤原 寛 2000 『天理西山古墳外環土の埴輪について』(『天理大学紀』第 13 号) 山内紀綱
- 山内紀綱 2001 『環山古墳』(『大和前方後円墳集』) 藤原考古学研究所研究成果第 4 冊
- 藤田博樹 2002 『奈良盆地東部部の古墳』(『大和の古墳』) 新編近畿古墳の考古学第 2 巻
- 小田木太治 2006 『環山古墳』(『天理市埋蔵文化財調査報告』平成 10—12 年度)
- 小田木太治 編 2014 『環山古墳—小塚明博博士の遺稿研究』(『環山古墳の研究』) 畿内古墳群研究会
- 藤田博樹 2014 『埋蔵文化財調査報告』(『天理市埋蔵文化財調査報告』平成 14 年度)
- 山内紀綱 2014 『三次元レーザーシェーピング測定の結果』(『環山古墳の研究』) 畿内古墳群研究会
- 小塚明博 2007 『環山古墳』(『天理市埋蔵文化財調査報告』平成 9 年度)
- 竹谷俊夫・藤原 寛 2000 『天理西山古墳外環土の埴輪について』(『天理大学紀』第 13 号)
- 小田木太治 2014 『環山古墳—小塚明博博士の遺稿研究』(『環山古墳の研究』) 畿内古墳群研究会
- 東天井山古墳・西天井山古墳
- 藤田博樹・山内紀綱 1978 『研究討議資料 東天井山古墳・西天井山古墳』(『科学考古学総合研究発表報告書』) 天理大学学部博物館学研究室
- 日野正 1985 『大和における首長系群の一側—畿内古墳群の首長墓の変遷—』(『天理大学紀』第 145 輯) 天理大学
- 日野正 2014 『東天井山古墳・西天井山古墳』(『畿内古墳群の研究』) 畿内古墳群研究会

西成書局

- 土生直樹 1976 『研究討議資料 3 西成書局』(『科学研究費補助金研究発表報告書』) 天理大学学部博物館学研究室
- 亀田博 1982 『西成書局遺跡発掘調査報告—天理市山内古墳群の発掘に伴う発掘調査—』(『奈良県遺跡調査報告』第 181 年度) 奈良県教育委員会
- 奥沢 1986 『小塚古墳(竹西成書局古墳立)』(『天理市埋蔵文化財調査報告』昭和 61—62 年度)
- 山内紀綱 編 1992 『環山古墳—西成書局古墳群—』(『天理市埋蔵文化財調査報告』平成 4 年度)
- 藤田博樹 2000 『西成書局古墳の調査』(『天理市埋蔵文化財調査報告』平成 11—12 年度)
- 山内紀綱 2001 『西成書局古墳』(『大和前方後円墳集』) 藤原考古学研究所研究成果第 4 冊
- 山内紀綱 2014 『西成書局古墳と東成書局古墳』(『畿内古墳群の研究』) 畿内古墳群研究会
- 石田大輔 編 2016 『畿内古墳群』西成書局。『天理市埋蔵文化財調査報告』第 10 巻
- 鈴木明博・石田大輔・堀本孝子・高橋 2016 『小塚古墳出土土器製品の研究』(『環山古墳の研究』) 日本文化財科学会第 33 回大会研究発表報告書
- 石田大輔 2020 『環山古墳群を用いたコミュニケーション・モグラフィ—土器による古墳群内での 3 次元可視化』(『科学研究費補助金研究発表報告書』)

小塚古墳

- 奥沢 1986 『小塚古墳(竹西成書局古墳立)』(『天理市埋蔵文化財調査報告』昭和 61—62 年度)
- 奥沢 1992 『小塚古墳(第 2 次)』(『天理市埋蔵文化財調査報告』昭和 63—平成元年度)
- 山内紀綱 2001 『小塚古墳』(『大和前方後円墳集』) 藤原考古学研究所研究成果第 4 冊
- 石田大輔 2014 『小塚古墳の埴輪』(『畿内古墳群の研究』) 畿内古墳群研究会
- 石田大輔 編 2016 『畿内古墳群』西成書局。『天理市埋蔵文化財調査報告』第 10 巻
- 鈴木明博・石田大輔・堀本孝子・高橋 2016 『小塚古墳出土土器製品の研究』(『環山古墳の研究』) 日本文化財科学会第 33 回大会研究発表報告書
- 藤田博樹 2019 『環山古墳群—小塚古墳立—』(『天理市埋蔵文化財調査報告』令和元年度)
- 奥山山古墳
- 角田昌高 2005 『畿内古墳群における未調査古墳』(『布直』第 16 号) 天理大学歴史研究会
- 小田木太治 2020 『天理市福山山古墳の埴輪—畿内古墳群(後)最大古墳の可能性—』(『古事』天理大学考古学・民俗学研究室紀要) 第 24 号
- 豊原山古墳
- 豊原山古墳 1916 『環山古墳』(『奈良県史蹟調査報告書』第 3 回) 奈良県
- 藤原 寛 1918 『大和府北部の古墳に就いて』(『人間雑誌』第 31 巻) 第 2 号
- 伊藤清彦 1942 『環山古墳を有する前方後円墳集』(『大和の古墳』) 奈良県史蹟調査報告書

21冊

- 亀田博 1982 『西成書局遺跡発掘調査報告—天理市山内の古墳群の発掘に伴う発掘調査—』(『奈良県遺跡調査報告』第 181 年度) 奈良県教育委員会
- 千原久 1997 『畿内の構式石室成立の過程』(『文化遺産—伊藤進先生古墳誌論集—』) 伊藤進先生古墳誌論集編集委員会
- 山内紀綱 2001 『西成書局古墳』(『大和前方後円墳集』) 藤原考古学研究所研究成果第 4 冊
- 山内紀綱 2014 『西成書局古墳と東成書局古墳』(『畿内古墳群の研究』) 畿内古墳群研究会
- 藤田博樹・小田木太治・堀本孝子・石田大輔 2019 『西成書局古墳(第 2 次)』(『天理市埋蔵文化財調査報告』平成 20 年度)
- 藤田博樹・小田木太治・藤原 寛・石田大輔・天理大学遺跡調査チーム 2019 『天理市西成書局古墳 2019 年度調査報告』(『古事』天理大学考古学・民俗学研究室紀要) 第 23 号
- 藤田博樹・小田木太治・堀本孝子・石田大輔 2020 『西成書局古墳(第 3 次)』(『天理市埋蔵文化財調査報告』平成 30 年度)
- 小田木太治・藤原 寛・堀本孝子・石田大輔・天理大学遺跡調査チーム 2020 『天理市西成書局古墳 2020 年度調査報告』(『古事』天理大学考古学・民俗学研究室紀要) 第 24 号
- 藤田博樹・小田木太治・堀本孝子・石田大輔 2021 『西成書局古墳(第 4 次)』(『天理市埋蔵文化財調査報告』令和元年度)
- 石田大輔 2021 『西成書局古墳—小塚古墳立—』(『天理市埋蔵文化財調査報告』令和元年度)
- 角田昌高 2005 『畿内古墳群における未調査古墳』(『布直』第 16 号) 天理大学歴史研究会
- 石田大輔 2021 『西成書局古墳—小塚古墳立—』(『天理市埋蔵文化財調査報告』令和元年度)

III 畿内古墳群の形成

- 寺岡清博 1982 『環山古墳』(『天理大学紀』第 157 輯) 天理大学
- 日野正 1995 『環山古墳に於ける古墳群の形成問題について』(『西成書局古墳誌論集』) 藤原考古学研究所
- 高野野樹 編 2010 『西成書局古墳群(北成・北池) 地区発掘調査報告書』(『考古学調査研究中間報告』2 埋蔵文化財天理調査団)
- ツルノ古墳群
- 日野正 1985 『大和における首長系群の一側—畿内古墳群の首長墓の変遷—』(『天理大学紀』第 145 輯) 天理大学
- 日野正 1988 『西成書局と東成書局—環山古墳群とその形成について—』(『天理大学紀』第 145 輯) 天理大学
- 日野正 1995 『環山古墳に於ける古墳群の形成問題について』(『西成書局古墳誌論集』) 藤原考古学研究所
- 日野正 編 1999 『布直遺跡出土の埴輪について』(『天理大学紀』第 13 号) 山内紀綱
- 20 年度文化財天理調査団
- 芝山古墳
- 白石太郎 1979 『資料紹介—畿内古墳群の発掘調査の中間報告—』(『布直』第 7 号)
- 日野正 1985 『大和における首長系群の一側—畿内古墳群の首長墓の変遷—』(『天理大学紀』第 145 輯) 天理大学
- 山内紀綱 2001 『環山古墳』(『大和前方後円墳集』) 藤原考古学研究所研究成果第 4 冊
- 高野野樹 2014 『環山古墳について』(『畿内古墳群の研究』) 畿内古墳群研究会
- 深川 1913—1937 年
- 竹谷俊夫 1991 『環山古墳群(北成)の発掘調査』(『発掘調査』20 年 埋蔵文化財天理調査団)
- 山内紀綱 2001 『環山古墳』(『大和前方後円墳集』) 藤原考古学研究所研究成果第 4 冊
- ツルノ古墳群
- 天理市史蹟調査委員会 1958 『天理市史蹟』
- 藤田博樹 2014 『環山古墳 2 号墳発掘調査報告』(『天理市埋蔵文化財調査報告』平成 14 年度)
- 保原山古墳
- 角田昌高 2005 『畿内古墳群における未調査古墳』(『布直』第 16 号) 天理大学歴史研究会

IV 畿内古墳群の形成

- 環山古墳
- 天理市史蹟調査委員会 1958 『天理市史蹟』
- 近江高司 1969 『奈良県天理市環山古墳』(『日本考古学』第 17 号)
- 竹谷俊夫 1991 『環山古墳の発掘調査』(『発掘調査』20 年 埋蔵文化財天理調査団)
- 竹谷俊夫 1990 『環山古墳の報告書』(『天理大学紀』第 3 号)
- 竹谷俊夫 1991 『環山古墳について』(『天理大学紀』第 13 号)
- 藤田博樹 2002 『環山古墳群の調査』(『天理市埋蔵文化財調査報告』平成 10—12 年度)
- 藤田博樹・小田木太治・堀本孝子・石田大輔 2015 『天理市環山古墳 2014 年度調査報告』(『古事』天理大学考古学・民俗学研究室紀要) 第 19 号
- 環山古墳
- 藤原 寛 1918 『大和府北部の古墳に就いて』(『人間雑誌』1—5 巻)
- 藤原 寛・山内紀綱 1977 『研究討議資料 環山古墳』(『科学考古学総合研究発表報告書』) 天理大学学部博物館学研究室
- 白石太郎 1962 『環山古墳の調査』(『国立歴史民俗博物館研究報告』第 1 巻) 国立歴史民俗博物館
- 山内紀綱 1992 『環山古墳の調査』(『環山古墳—西成書局古墳群—』) 天理大学歴史研究会
- 環山古墳調査報告書
- 石田大輔 2014 『環山古墳とその周辺』(『畿内古墳群の研究』) 畿内古墳群研究会
- 天理市史蹟調査委員会 1913 『大和郡誌』(中巻)
- 天理市史蹟調査委員会 1958 『天理市史蹟』(2 冊)
- 本村善一 1980 『古墳時代の研究』(『研究』(1)) 『東京国立博物館紀要』第 16 号
- 末永道雄 1981 『環山古墳の調査』(『天理大学紀』第 13 号)
- 角田昌高 1980 『天理市史蹟調査報告』(『天理市史蹟調査報告』)
- 角田昌高 2005 『畿内古墳群における未調査古墳』(『布直』第 16 号) 天理大学歴史研究会
- 藤田博樹 2014 『環山古墳とその周辺』(『畿内古墳群の研究』) 畿内古墳群研究会
- 国立国史研究所 2016 『環山古墳群』(『環山古墳群』) 国立国史研究所
- 奈良県埋蔵文化財調査システム Colbase <https://colbase.nichg.jp/>
- 奈良県埋蔵文化財調査システム Colbase <http://www.kashikiken.go.jp/ps/RemainArea.jsp>
- 畿内古墳群
- 藤田博樹 2014 『環山古墳群』(『天理市埋蔵文化財調査報告』平成 14 年度)

令和3（2021）年7月14日発行

物部氏の古墳 柚之内古墳群

編集 天理大学附属天理参考館
天理市守目堂町 250
天理市教育委員会
天理市川原城町 605

発行 天理市教育委員会

印刷 東洋印刷株式会社
桜井市三輪 371

SOMANOUCI Tumulus Group: Mononobe Clan's Tombs



2021

Tenri University Sankokan Museum
Tenri City Board of Education